

令和元年・2年度 幼児教育研究

様々な遊びの中で健やかに育つ子ども育成をめざして

小学校へ伝えたい

豊かな環境の中で育つ
“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”
～0歳児から5歳児までの育ちを小学校へ～



令和2年2月
八尾市
八尾市教育委員会

はじめに

平成 29 年 3 月に告示された「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」において、“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”が示されました。この“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”は、就学前施設において乳幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、「就学前施設の教育・保育において育みたい資質・能力」が育まれている子どもの具体的な姿で、特に 5 歳児後半に見られるような姿です。この“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”を、保育者と小学校の教師が子どもの姿を共有するツールとして活用しながら、就学前教育・保育と小学校教育の円滑な接続を図ることが求められています。

本市では、これまで、学校園間での交流活動や幼保小合同研修会などの機会に、具体的な子どもの姿を共有し、就学前教育・保育と小学校教育の円滑な接続をめざしてきました。しかし、子どもの成長を分かりやすく伝え、深く理解してもらうためには、5 歳児後半に見られる姿だけを伝えるのでは十分ではないと感じます。

本研究では、0 歳児から 5 歳児のそれぞれの時期から、乳幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねてきました。そして、研究において集積した、生活や遊びの中で育まれた具体的な力についてのエピソードを“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”の視点で分類し、事例集としてまとめました。

この事例集が、就学前施設間で子どもの育ちを共有したり、0 歳児からの発達や学びの連続性の中で育まれた資質・能力を小学校へ伝えたりする時の、ツールの 1 つとして活用されることを願っています。

小学校へ伝えたい

目 次

豊かな環境の中で育つ“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿” ～0歳児から5歳児の育ちを小学校へ～

○健康な心と体・・・・・・・・・・・・・・・・	1
○自立心・・・・・・・・・・・・・・・・	7
○協同性・・・・・・・・・・・・・・・・	13
○道徳性・規範意識の芽生え・・・・・・・・	19
○社会生活との関わり・・・・・・・・	25
○思考力の芽生え・・・・・・・・	31
○自然との関わり・生命尊重・・・・・・・・	37
○数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	43
○言葉による伝え合い・・・・・・・・	49
○豊かな感性と表現・・・・・・・・	55



健康な心と体

幼保連携型認定こども園における生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。





心地よい日差しを感じながら、園周辺を散歩しています。

歩行が安定してきた子どもは、安全な道を自分の足で歩くことを楽しんでいます。保育者が「待て待てー！」と追いかけると、子どもたちもニコッと笑顔で応じ、かわいい足取りで一生懸命に歩いています。

また、保育者の歌に合わせて、バギーに乗りながら体を揺らしてリズムを取ったり、道端で見つけた葉っぱを手に持ち嬉しそうに握りしめたり、中には職人のように葉っぱを一枚ずつ真剣かつ丁寧にちぎったりする姿も見られます。

園外を散歩をすることで、風を肌に感じたり、草花を見て触れて季節感を感じたり、車や散歩中の犬を見つけて喜んだりしています。散歩の回数を重ねるごとに歩ける距離も長くなり、伸び伸びと歩行を楽しむ姿が見られるようになってきました。

学びのポイント

子どもたちにとっての散歩は、身近な自然に触れる大切な機会であり、その季節ならではの物を見たり実際に触れたりしながら、五感を震わせて感性を豊かにできる貴重な時間です。また楽しく歩きながら体力をつけることもでき、成長に欠かせない機会にもなっています。

環境構成の工夫

散歩のコースは園周辺や小学校、中学校など車があまり通らず、田や畑、草や花などの自然に触れることができる道や場所を選んでいきます。散歩以外では坂道マットを活用したり園庭の築山で遊んだり、園内の階段登りをしたりして、体幹を鍛えたり体力づくりに取り組んでいます。



テラスにボールやミニハードルを出し、子どもたちが使えるように置いておくと、各々選んで遊び始めました。

ミニハードルは、春に2歳児が並べて歩いたり、ジャンプをしたりして使っているのを見ていた子どもも多かったため、すぐに興味をもって抱えて運び始めました。自分で並べたい形があるようで、子どもの思いを汲み取りながら手伝っていました。

しばらく並べて遊んだ後は、歩いたりジャンプしたりしたくなるように、保育者が1列に並べてみました。ところが保育者に手を持ってもらっても1歳児にはまだバランスが取れず難しいようでした。

そこで、ぴったりと2本がくっつくように並べると、バランスが取りやすくなり、手を持ってもらってカニ歩きを楽しむようになりました。友だちの様子を見て、自分もやってみたくて真似をする子どもも増えました。最後まで歩くことができると「できた！」ととても嬉しそうな表情を浮かべ、「もう一回！」と繰り返し楽しんでいました。



学びのポイント

並べ方を工夫することで1歳児でもバランスがとりやすくなり、自分で渡れたという喜びやまたやってみたくてという気持ちにつながりました。この時期には体を動かして遊ぶ楽しさや心地よさを味わえるように、でこぼこ道、坂道、トンネルなど様々な環境を用意し、全身を使う遊びを楽しめるようにしています。



環境構成の工夫

好きな遊びの中で体を動かして遊べるように、子どもたちの手が届くところにミニハードルを用意しました。子どもの様子を見守りながら並べ方を変えることで、「自分でできた」「もう一回やってみよう」という気持ちにつながりました。安全面に十分配慮しながら、満足できるまで保育者も一緒に遊びを楽しみました。



保育者が新聞紙を破るのを見て、端を少しずつ破る子どもや真ん中から豪快に破る子ども。「もっとちょうだい」の声に応じて新聞紙を渡すと、次から次へと破っていきます。

A「ゆきふってきたー！！」 保育者「みんなでふらせてみよう！」「いっせーのーで！」の合図で一斉に上に飛ばすと「うわぁー！！！」と、大興奮の子どもたち。寝転がって、保育者や友だちに「かけてかけてー！！！」とお願いしたり、「もっと小っちゃくしてみよう」と、友だちと声をかけ合ったりしています。部屋の中はワーカーと大騒ぎで新聞紙だらけになりました。

B「プールみたいやなぁ」 C「プールつくろうや！」

たまった新聞紙を見て話をする子どもたち。牛乳パックでつくった壁の内側に新聞紙を運んでプールをつくっていきました。夏のプールを思い出しながら、パタ足や背泳ぎなど、ダイナミックに泳ぐことを楽しめます。プールでできるようになったワニ歩きを得意げに披露している子どももいました。

💡 学びのポイント

新聞紙をちぎったり投げたりする楽しさや部屋中に広がった新聞紙が、夏に存分に楽しんだプール遊びのイメージとつながりました。また、毎日過ごしている保育室で信頼できる保育者や大好きな友だちと一緒に遊ぶことが安心感となり、ダイナミックに体を動かして遊べるようになりました。

👍 環境構成の工夫

安全に配慮しながら、普段はなかなかできないような遊びをみんなで楽しむことにしました。保育者も一緒に遊びを思い切り楽しむことで、子どもたちも心を解放してダイナミックに遊ぶことができました。活動に入りにくい子どもには、1対1でかかわりながら少しずつ遊びの輪に入っていけるように援助しています。



Aは野菜が苦手で、給食でもなかなか食べることができませんでした。

9月の後半にラディッシュの種をまき、当番活動で水やりなどのお世話をしました。Aもクラスの子どもたちも芽が出た時は大喜び。「せんせー！できた！」と、テラスに出て眺めたりそっと触れたりしていました。

葉が虫に食べられた時には、子どもたちが虫を捕まえて、何とかラディッシュを育てることができました。

できたラディッシュは順番に持って帰ることにしましたが、Aも自分で水やりをしたのでとても楽しみにしていました。



やっとAの順番が来ると、「これAのなん？」「持って帰っていいん？」とラディッシュを抜いて嬉しそうにしていました。保護者に、Aの嬉しそうな様子を伝え、持ち帰ったラディッシュを家庭で調理してくださいました。翌日には「せんせー！おうちでラディッシュたべたよ！」とAが嬉しそうに報告してくれました。園の給食や家庭でも少しずつ野菜が食べられるようになってきています。



学びのポイント

野菜の苦手なAが、友だちと一緒にラディッシュの世話をすることを通して、野菜に興味をもちました。野菜は簡単には育たず、毎日水をやりたり害虫を駆除したりすることが必要です。苦労して育てたラディッシュだからこそ、大切に感じ食べてみようという気持ちにつながりました。



環境構成の工夫

種まきから収穫までが早い野菜を選び、子どもたちが世話をしやすいように、保育室からテラスに出られるようにゴザを敷いたり、ジョウロや虫かごも十分な数を用意しました。また興味をもてるように当番表や収穫表など、子どもの目で見分けて分かりやすいものを掲示しました。保護者にも栽培の様子やAの気持ちを伝えることで、家庭で調理してもらい食べられたことを親子で喜ぶことができました。



「子どもの日の集い」の職員の出し物に、金太郎が力強く相撲をする場面があり、その姿に感銘を受けたA。園庭に出るなり、すぐに担任が扮した金太郎との対決に挑みます。始めはなかなか勝てずに悔しい思いをしながらも何度も挑戦していました。「金太郎頑張れ」「A 負けるな」との歓声を聞きつけ、たくさん子どもたちが集まって来て、いつの間にか金太郎のお相撲大会が始まりました。



どんどん遊びが盛り上がってきたので、力士のまわし、金太郎バッジ、行司の軍配などをカゴに入れて用意しました。すると、登園するなり子どもたちで誘い合って遊び始め、5歳児と対決する時には1人対2人で戦ったり、負けそうになると手助けをしたりとやり取りを楽しんでいました。

繰り返し遊ぶうちに、遊びに必要な道具や物をもってきて土俵の線を描いたり、「お相撲やる人～」などと誘い合う声も多く聞かれました。

また、「金太郎みたいに強くなりたい」という思いをもち、給食を残さず食べようとする姿も見られました。



学びのポイント

「楽しそう。やってみたい！」と金太郎という存在に刺激を受けたAが、担任が扮した金太郎との勝負に何度も挑戦する姿を見て周りの子どもたちも参加し、金太郎のお相撲大会は2学期になっても続きました。相撲はルールが分かりやすく、子どもだけでも楽しむことができるので、継続する遊びとなりました。また「金太郎は何でもよく食べる」と聞いて好き嫌いせずに食べようとする姿も見られ、遊びと生活が密接につながりあっていることが感じられました。



環境構成の工夫

職員の出し物を考える際に、子どもたちが興味をもちそうな題材を選んだことで、遊びにつながりました。また、出し物の後も、子どもの思いを受けとめ保育者が金太郎役になりきって相撲をとったり遊んだりすることで、遊びが継続していきました。子どもたちだけでも遊べるように「まわし」や「行司の軍配」などを用意したことも遊びが広がるきっかけとなりました。



運動会をきっかけに、竹馬やうんていなどに自分から取り組む姿が見られるようになりました。

うんていでは、ぶら下がることを楽しんだり、端から端まで落ちずに行こうと挑戦したり、友だち同士見せ合ったりしていました。うまくいかない時には、友だちに「どうすれば端から端までいけるん？」と聞き、聞かれた子どもも、「リズムよく手を動かすねん」「こんなふうにするねん」と手本を見せたり、アドバイスをしたりしていました。また、友だちがしている姿を見守りながら、「さっきより進んでる！」「もうすぐできそう！」と一緒に励ましたり応援したりする姿も見られました。

「もう余裕でいけるで」「私もうまいで」と、うんていに自信をもつ子どもが増え、「じゃあ勝負しよ」と友だちを誘い、どちらが先に端まで着くかの勝負が始まりました。その様子を見て審判をする子どもも出てきました。

勝負に負けても「もう一回やりたい」「今度は負けへんで」と繰り返しうんていで遊んでいます。数日後には、「端から端まで何秒か数えてほしい」「じゃあ勝負しながら、何秒か数えよう！」と、秒数を数える遊びに発展していきました。

学びのポイント

友だちの存在がよい刺激となり、自分が苦戦していても友だちのやり方を見たりコツを聞いたりして、納得のいくまで繰り返し挑戦しました。できるようになったことが自信となり、負けても諦めず友だちとの勝負を楽しんでいました。体を自在に動かす満足感を存分に味わいながら、次々と遊びを変化させ新たな楽しさを味わっていきます。

環境構成の工夫

運動会に向けて、竹馬・跳び箱・縄跳びにみんなで取り組みました。保育者も一人ひとりに寄り添いながら、継続して取り組めるように励ましてきました。運動会当日には、頑張っている姿をたくさんの人に見てもらい大きな自信となりました。この経験をもとに、運動会後は様々な運動遊具に興味をもち、子どもたち同士で教え合うようになりました。保育者は敢えて手を貸さず、子どもたちのやり取りを見守ることにしています。



自 立 心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。





鏡シートを初めて部屋に貼った時、「これはなに？」という様子で、子どもたちがすぐに集まってきました。

A が鏡シートを見つめていると B も鏡シートに興味を示しました。鏡シートに映った姿を自分だと認識しているわけではない様子で、二人とも不思議そうにしていました。



数日後、A は鏡シートに映る自分の姿を見つけると嬉しそうに見つめ、「あー」と言って笑いかけたり、鏡シートを触ってみたり叩いてみたりして、鏡シートの素材を確かめていました。また、鏡シートに映った保育者や友だちの姿を見て、にっこり笑ったり、コミュニケーションをとったりして楽しんでいました。

C は鏡シートを見ながら動くことを繰り返すうちに、鏡に映った姿が自分と同じ動きをしていることに気づき、何度も動いて確かめていました。



学びのポイント

行動範囲が広がるにつれて、自分以外のものへと興味が広がり自らアプローチするようになります。ここでは、自分と同じ動きをする鏡シートがおもしろく、何度も繰り返して体を動かしてみたりするうちに、鏡シートに映っている自分の存在に気づきました。

自分でやってみたいという思いを大切に、様々な経験を重ねることが自立心につながっていきます。



環境構成の工夫

座ったり寝転んだりした状態でも見える位置に鏡シートを置き、保育者が鏡と一緒に映ってみたり、子どもが鏡に映った友だちや自分の姿に気がつくように声をかけたりしました。そうすることで鏡シートに映る自分に気づくことができました。



最近、紙おむつから布パンツで過ごすようになった A。好きなキャラクターのパンツが嬉しくて、自分で履こうとする姿が見られます。しかし、パンツに足を通すことはまだ難しく、チャレンジしてみますが通すことはできません。

そこで足を通すのを保育者がさりげなく援助すると、そこからは自分でパンツを上げ履こうとします。保育者に手伝ってもらいながらも自分で履けたことが自信となり、次はズボン履く事にもチャレンジしました。すると、ズボンにも自分で足を通す事ができ、一人で最後まで履く事ができました。A は“自分でできた！”という満足気な表情で、達成感を味わっていました。



また、その隣で A の姿を見ていた B は、刺激を受けて自分でパンツを履こうとしていました。

💡 学びのポイント

まだ一人ではパンツの穴に足を通せませんが、保育者がさりげなく援助することにより自分で最後までパンツを履くことができました。そのことが、自分でできたという達成感や自信につながりました。

👍 環境構成の工夫

自分でパンツやズボンの着脱がしやすいように台を用意しておき、進んで履くことができるようにパンツとズボンを用意しておきました。自分で着脱しようとする気持ちを大切にしながら援助をして、できたときは保育者も一緒に喜び、思いを共感できるようにしています。



秋頃になると、子どもたちの動きも活発になり、気候もよいので散歩に出かける機会が多くなっていました。普段からよく出かける公園には、少し大きめの複合遊具があります。

Aは、怖いけれど大きな滑り台を滑りたいという思いがあり、一番に丸太の階段を上っていききました。しかし上につくと、やはり高いところが怖いので足がすくんでしまい、「怖い！無理！」「先生、助けて～」と弱々しい声で助けを求めています。滑り台からおろしてあげると、また上っていきます。保育者と一緒に滑るように誘ってみたけれど、だめでした。

するとBが「一緒に滑ったらか？」と声をかけてくれました。普段から仲のいいBが声をかけてくれたことにより、Aもすんなり「うん。」と言い一緒に滑り台を滑ってみました。「楽しい！怖くない！」何度か一緒に滑った後、今度は一人で滑ります。「楽しいなあ！」「もう怖くないで！」と滑れたことが嬉しく、得意気な表情でした。



学びのポイント

仲良しの友だちが声をかけてくれることで、怖いけれど一緒にやってみようという気持ちが生まれました。友だちと一緒にという安心感のもと挑戦し、滑れたことが自信につながり、一人でも滑ってみようという気持ちにつながりました。



環境構成の工夫

怖いけれど滑ってみたいというAの気持ちを汲み取り、見守りながら援助するようにしました。無理強いすることはせず、子どもの姿に合わせて思いが満たされるようにかかわっています。



Aは経験が少ないことに対しては、「できない。」と言うことが多いのですが、鉄棒で“豚の丸焼き”ができるようになると、毎日取り組むようになりました。

Aが「鉄棒やりたい！」と始めるとBとCもやってきました。Aは保育者に援助をしてもらいながらツバメを、Bは豚の丸焼きを、その近くでCは自分で足抜き回りをしていました。AもBも足抜き回りをしたいのですが、少し怖いと思っています。AB「Cちゃん、すごーい！！」と言って拍手をすると、Cは照れて嬉しそうにしていました。

「Aもやってみる！」保育者に援助をもらいながら足抜き回りを成功させることができました。「できた！！！」と目を真ん丸にして大喜び。Bは、どうしようか迷っている様子でした。「Bちゃんもやってみる？」と保育者が声をかけるとうなずき、保育者に援助してもらって成功しました。「やった！できた！」と3人で飛び跳ねながら大喜びしていました。

A「みんなにも言いたい！ニュース(話し合い)する！」話し合いの時間にAとBは、はりきって手を挙げ話をしました。B「今日ね、初めて足抜き回りができた！」他の子どもたち「えっ、そうなん!？」保育者「Aちゃんもできたね。」A「最初ちょっと怖かったけど、できて嬉しかった！」他の子どもたち「すごいやん！すごいなあ。やりたい！」

その後、他の子どもたちも足抜き回りにチャレンジするようになりました。

学びのポイント

AとBは、Cの姿に刺激を受け“できるようになりたい”という気持ちをもってチャレンジしました。AとBは足抜き回りが成功して達成感を味わい、さらに意欲的に取り組むようになりました。Cは友だちに認められたことで自信をもちました。さらに、話し合いの場で成功した喜びを伝え、友だちと共有したことで、話を聞いたクラスの友だちにとっても刺激となりました。

環境構成の工夫

体を動かす楽しさを感じられるように、色々な運動遊具を少しずつ準備しました。友だちの様子に気づくように見えやすい場所に鉄棒を置くことで、チャレンジする友だちが見えるようにしました。話し合いの時間にがんばった姿を認め合うようにしました。



子どもたちは、進級当初より、体を動かすことが好きで楽しんでいました。

運動会后、5歳児の影響もあって「逆上がりしたい！」と練習を始めました。逆上がりのできるAが登り棒の一角で練習して、できるようになったことを思い出し、まずは「ここで練習しよう」と数人が登り棒の一角に集まりました。

「やってみるわ」この場所で練習をし、少しずつコツをつかみ始めました。Aが「見本見せてあげる」と登り棒に足をかけて、蹴り上げるところを見せます。「もう少し！」と互いに応援しあい、繰り返し遊んでいました。

登り棒を利用して、逆上がりができるようになると自信をもち、「次は鉄棒でやってみたい」と5歳児の使っていた補助紐を使い練習を始めました。

初めはなかなかできませんでしたが、「足もっと伸ばして」「腕は曲げて！」などと声をかけ合うことでフォームを意識し始めました。もう一息のところ落ちてしまう友だちのお尻を持ち上げ、助け合う姿も見られます。数日に渡って諦めずに練習を続けた結果、「一人でできた！」、補助紐を使って数名ができるようになりました。「みんなでするから見てて！」と友だち数人で一斉に逆上がりをし、できた喜びを友だち同士で分かち合い、保育者にも伝えていました。



学びのポイント

一人ひとりが「逆上がりがしたい」と自分なりの目標をもって、何度も繰り返し練習しました。また、友だちの経験を真似て、鉄棒だけでなく固定遊具（登り棒）を活用するなど、練習方法を考え工夫して取り組みました。また、友だち同士で教え合ったり励まし合ったりしながら取り組んだことで、あきらめずに何度も挑戦しようとする意欲が高まっていったようです。



環境構成の工夫

安全面に配慮して、登り棒をしたい子どもたちに少し場所を空けてもらうようにし、挑戦できる場を確保しました。また、5歳児が使用した鉄棒の補助紐をそのまま使用できるようにしておいたり、何度もチャレンジできる時間を保障したりしたことで、憧れの気持ちから自分もやってみようという意欲につながりました。



近隣の小学校との交流で、小学生がつくったゲームで遊ぶ機会がありました。その中で、Aは「丸い穴のところに投げてるんだけど、なかなか入らないんだ。穴が小さいから難しい。」と言いながら、ストラックアウトを楽しんでいました。

園に戻るとさっそく、ストラックアウトづくりが始まりました。Aが「小さい穴のままでいいよ。」と言いながらつくっていると、Bが「じゃあ、私はお星さまの形にしようかな。ギザギザのところにを入れるのは難しいかもしれない！」と話し、意見を出し合いながら段ボールに穴を開けていきました。小学校のストラックアウトには点数もついていたので、穴ごとに点数も決めていきました。

完成すると、さっそく遊び始めます。最初は小さな穴には入らなかったものの、コツを掴むと少しずつ入る回数が増えていきました。周りの友だちも興味をもち、ボールが穴に入ると一緒になって喜んでいました。Aは「頑張ったからできるようになったよ！僕、すごいね！」と満足し、友だちにも認められ、達成感に満ちた表情をしていました。

💡 学びのポイント

楽しかった経験から、自分でもその遊びを再現しようと、園にあるもので工夫してつくっていました。できるまでチャレンジしたいという子どもの思いを大切に、試行錯誤しながら何度も繰り返して遊ぶ時間を持ちました。自分でゲームをつくりボールを入れることができた喜びを味わうとともに、友だちからも認められ、自信につながりました。

👍 環境構成の工夫

挑戦したいと思ったことに取り組めるように、様々な素材を準備したり用具をそろえておいたりしました。遊ぶ時には、他の遊びと交錯しないように場の設定を工夫し、子どもの活動を見守りました。



協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。





まだ歩行が安定していない子どもの移動には、ワゴンを使用する時があります。どんどん歩ける子どもが増え、ワゴンに乗る子が少なくなった外遊び日和の日のこと。

探索活動を楽しむ A が端に置かれているワゴンに気づき、ワゴンの紐を持ちながら保育者に“これ出して”と訴えてきました。保育者がテラス中央にワゴンを出し、そばに寄ってきた子どもを乗せると、A は保育者が普段しているように紐を引っ張って動かそうとします。“楽しそう！”“僕も！”と他の子どもも集まって来て、なかなか動かないワゴンを「なんとか動かそう」と一生懸命に引っ張る姿はとても可愛いものでした。

また、園内ではこんな姿も見られました。乗り物が好きな B がコンビカーやワゴンに乗ると必ず C がやってきて、後ろから膝歩きで押します。B は“C がいつも押してくれる！”と感じたようで、そのうち、乗り物に乗ると“C くん押して～”と熱い視線を送って C を待つようになりました。まだ一人では動かすことのできないコンビカーやワゴンですが、友だちと一緒に楽しむことができました。



学びのポイント

身近な大人が普段していることを模倣しようとしていました。また、そんな友だちの姿を見て、「一緒にしよう」とする子どもも出てきました。遊びや生活の中で徐々に人への興味が高まり、友だちの存在に気づきます。保育者の仲立ちによって友だちとかわり、「楽しい」という気持ちを共有できるようになっています。



環境構成の工夫

まだ自分の思いを言葉にできない0歳児のため、喃語や身振り、視線などの子どもの表情やアピールを見落とさないよう気をつけています。保育者との信頼関係を基盤にしながら、周囲の友だちへも関心をもち始めたので、かわりが楽しいと感じられるように、保育者が仲立ちとなって遊べるようにしました。



A がブロックを高く積み上げて楽しんでいました。その様子を見ていた B がそばにやってきて一緒に積み始め、自然と順番を交代しながら交互に積んでいくようになりました。

すると、高くなったことでブロックのバランスが崩れて倒れてしまい、2人で「あぁ～！」と言っていました。その様子を見ていた保育者が「あぁ～！倒れたねー！もう一回！」と言うと、再び積み上げたものの、また倒れてしまいます。今度は3人で「あぁ～！」と言うと、高く積むことよりも倒れて「あぁ～！」と言うことが楽しくなり、少し積んではどちらかが倒れて大笑いしながら、繰り返し遊んでいました。

倒すことを楽しんでいた2人ですが、Bが「高く！高く！」と言ったことにより、再び協力して積み始めます。

保育者が「高くなってきた！ゆっくりね！」と、声をかけると慎重に積んでいき、初めに遊んでいた時よりも高く積むことができました。

高く積み上がったブロックを見て、2人とも手を叩いて喜んでいました。



学びのポイント

友だちと順番を交代しながらブロックを一緒に積み上げ、高くなるドキドキ感や倒れた時の驚き・楽しさを、言葉や表情・仕草を通して友だちと共有しています。また、「高く！」と、やってみたいことを言葉で友だちに伝えたことで、目的の共有ができました。



環境構成の工夫

積む・つなげるなどの遊びがしやすいように、低い机を出して遊びの場を整えました。子どもが遊びの中で何を楽しんでいるのかを読み取りながら、見守ったり思いに共感したり遊びが盛り上がるような声をかけたりと、目的が実現できるように援助しました。



ままごと遊びが好きで、お弁当をつくったり赤ちゃんのお世話をしたりして楽しんでいます。ある日、Aが「バス乗りたい!」と話したことをきっかけに、保育者が椅子をバスに見立てて用意すると、周りの友だちも集まってきて一緒にバスごっこを楽しむようになりました。

A「動物園行くよー。しゅっぱーつ」と“動物園に行こう”の歌を歌いながら、バスに乗ります。Bは「あっ!ハンドルつくってくる!」と、井形ブロックを丸くつないでハンドルに見立てて運転します。Cは「お弁当を持って行くー!」とつくったお弁当を持ってきました。Dは「赤ちゃんもつれてくるわ」と人形を抱いてバスに乗り込みます。他の子どもも友だちを真似て、バスは満員になりました。

しばらくすると、Aは「お弁当食べるよー。一緒に食べよっか」とテーブルへ行き、お弁当を広げて食べ始めました。

A「ウィンナー入ってるで!」「おにぎりおいしいなあ」と話しながら、見立て遊びを楽しんでいます。その様子を見て、他の子どもたちもお弁当をつくって来て一緒に食べました。

保育者「次はどこいく?」 D「おかいものー!」「しゅっぱーつ!」と遊びが続いていきます。

💡 学びのポイント

初めは2~3人で遊んでいましたが、保育者が並べた椅子をバスに見立て、「動物園に行こう」「うん」「お弁当を食べよう」と思いを伝え合いながら、遊びが広がっていきました。秋の遠足でお弁当を食べたことや家での経験をもとに、クラスみんながイメージを共有して楽しく遊ぶことができました。

👍 環境構成の工夫

子どもの思いが実現できるように、保育者がバスに見立てて椅子を並べました。また、お弁当箱やナフキンの数を増やしたり、お弁当に見立てられるような素材も用意しました。じっくりと遊べる時間を取り、子どもたちのやり取りを見守りながら、イメージが広がるような声をかけたことで、遊びが継続していきました。



園庭で、4歳児が数人でバランスカーに乗っているのを見たAは、「Aちゃんもやりたい！」とチャレンジし始めました。しかし、上に乗ることはできたものの進むことができません。そこへバランスカーに乗っていた4歳児のBが来て手をつないでくれたので、前に進むことができました。

周りで見えていた3歳児数人が自分もやりたいとやってきます。やはり、上に乗ることはできても前へ進むことができません。すると、先程4歳児のBに手をつないでもらっていたAが「手つないだらできるで！」と教えてくれました。何度かチャレンジすると、2人ずつ手をつないで進むことができました。

最後には、4人が横並びに手をつないで挑戦します。一斉には進めないと気づいたようで、自然と1こぎずつ交代しながら進みます。

しかし、4歳児と手をつないでいた時と違って、全員がバランスカーに乗っているため、方向がそろっていないと、進行方向が重なってしまったり離れて行ってしまうたりします。その度に「まっすぐしよ（並べよう）！」「もういっかい（手を）つなご！」とやってやり直し、楽しんでいました。



学びのポイント

「前に進みたい」という共通の思いをもって、友だちと一緒に取り組みました。手をつなぐと進みやすいことを友だちと共有し、動くタイミングをずらしたり一定の距離を保ったりしながら、工夫して遊んでいました。



環境構成の工夫

伸び伸びと体を動かして挑戦することができるように、広く使える安全な環境を整えています。この時期に興味をもつであろうバランスカーは、十分な数を用意しました。異年齢児と運動遊具に取り組む場所を共有することで、見て学んだり教え合うことができました。



朝から A の登園を待っている B と C。保育者「A 君早く来てほしいね」 B「A 君が来たら警察官ごっこしようって約束しているねん！」 C「早く来ないかな～」と、会話からワクワク感が感じられます。

B「A 君来た！早く遊ぼ～」 A「僕は警察署でパソコンの仕事するわ！」 保育者「パソコンの仕事もあるの？」 A「この前テレビでしててん！」と、ひらがなスタンプをパソコンに見立てて遊んでいます。 B「じゃあ、僕は防犯カメラ動いているか見てくるね！」 C「僕も防犯カメラ一緒に見るわ！」 B「ここには犯人が映っていません」 C「こっちの防犯カメラ壊れています！修理しないといけない」と、各々の警察の仕事が始まりました。

丸と半円のソファを組み立てた場所は警察署で、警察ごっこをしている子どもたちが集まってきました。 D「廊下には泥棒がいませんでした」 B「今日は平和やな～。パトカーでパトロール行ってきました」と廊下に出かけて行ったり、「ベランダからお山もパトロールしよう！」とベランダに椅子を並べたりしながら、遊びは続いていきます。

💡 学びのポイント

防犯教室で出会った警察官から刺激を受け、テレビで見た警察の仕事を再現して遊んでいました。初めは各々が警察になって遊ぶことを楽しんでいましたが、警察の帽子・警察のワッペンなどをつけることで“同じものを身につけ一緒に遊ぶ嬉しさ”を感じていました。また、警察署が基地となり、警察官になりきっていろいろな仕事を考えて遊んでいました。何気ない子ども同士の会話の中で“警察ごっこ”のイメージが具体化され、友だちと共有することで子ども同士がつながっていききました。

👍 環境構成の工夫

警察の帽子が遊びのきっかけとなっていたので、欲しい時に保育者が援助しながら一緒につくるようにしました。また、自分たちで警察官が使う道具をつくれるように、紙類や箱類、ペーパー芯などを準備しました。子ども同士でなりきって遊んでいる雰囲気大切にしながら、見守ったりイメージが共有できるように声をかけたりしています。



A「恐竜つくろう！大きいのにしたい！」 恐竜が大好きな A の言葉を聞いて B も一緒につくり始めました。 B「そしたら、段ボールでつくろうや」 A「いいよ！」 B「段ボール探してくるわ」 B「これで、立つように脚つくろ！！」 A「これで立つん？」 B「立つよ！ガムテープで止めたら大丈夫やろ」 A「ガムテープ自分でちぎれるようになったで」

二人の様子を見て、そこに C が加わります。 C「僕ここもとくわ」 A「ここちゃんと持ってて」 C「ここ？」 A「そう！」 B「そしたら貼っていくわ」 A「体もくっつけよーや！これでいける？」 B「いけるやろ」 A「体もとくわ」 C「僕ここおさえとく」

A・C「くっついた？」 B「ちょっと待って。もうちょっとしっかりくっつけるから」 A「できたら恐竜博物館しょ！」 B「そうしよう！」

恐竜が出来上がると、恐竜の周りをイスで囲み、恐竜博物館にしました。すると、たくさんの子どもたちが恐竜博物館に興味をもち、恐竜を見にやってきます。A・B・Cは博物館の人になって、お客さんに恐竜の説明をして遊びを楽しんでいました。



学びのポイント

「大きいのがつくりたい」という思いに共感した子ども同士がつながって遊び始めました。“大きい”ことで一人では扱いきれず、自然と役割分担をしながら共通の目的に向かっていきました。お客さんに恐竜の説明をする姿からは、協力して作り上げた喜びがうかがえます。



環境構成の工夫

普段から段ボールをたくさん準備していたことで、大きな恐竜をつくるという思いを実現することができました。保育室でつくるように場所を確保したことで、他の場で遊びを見ていたCも加わり遊びを楽しむことにつながりました。



道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。





A と保育者が、絵本を見て遊んでいると、B が近づいてきて、その絵本を取ろうとしました。A は全体重をかけて引っ張り、自分のものであると主張します。保育者が「A ちゃんの絵本よ」と B に声をかけますが、B は引っ張り続けます。A は全く絵本を離す気配がありません。

B は保育者に助けを求めるように、視線を向けます。保育者「だって、A ちゃんの絵本だもんね」しばらく、引っ張り合いが続きます。

ついに、B は引っ張りながら泣き始めました。それでも A は、気にせずぐいぐい引っ張ります。B が泣きながら絵本を離しました。

保育者「B ちゃん、絵本欲しかったんやねー。これは、A ちゃんの絵本。こっちが、B ちゃんの絵本。どうぞ」と、別の絵本を渡しました。B は絵本を受け取り見始めました。保育者「絵本見れて、よかったねー」

💡 学びのポイント

自我が芽生え、「これ僕の！」と自己主張をしっかりとできるようになってきました。まだまだ自分のものと人のものの区別がつかず、言葉で説明して理解できる時期でもありません。しかし、欲しいと思ったものが必ずしも自分のものにならないことを経験したり、友だちに自分のものを取られたり、0歳児なりに様々な体験をしていくことが、『人のものをとってはいけない』という『ルール』につながっていきます。

👍 環境構成の工夫

今回は、A が絶対に絵本を離さないであろうと予測し、B の行動をすぐに制止せずに見守ることにしました。保育者がすぐに止めたり解決したりするのではなく、いつでも手助けできる状態で見守る姿勢を心がけています。また、一人ひとりの思いを丁寧に受けとめるとともに、十分な数の遊具を準備しておいて、一人ひとりの遊びたいという気持ちが満たされるようにしています。



A が滑り台の上でのんびりとくつろいでいます。「気持ちいいな」と保育者とやりとりしたり“お兄ちゃん いてるかな”と園庭にいるお兄ちゃんを探したりしながら、見えています。すると、「B ちゃん きた」と、後方から階段を登ってくる B に気づきました。

「どうしようか…」と考えている様子の A。もう少しゆっくり座っていたいなという思いと、僕が滑らないと B が滑れないと B を気遣う複雑な思いが読み取られます。

B も、A の気持ちを察するかのように「一緒に滑ろう」と誘います。A は B の温かい誘いの言葉に「うん」と即答し、二人一緒に滑り台を楽しみました。



学びのポイント

いつもとは違う風景が見られる楽しさを滑り台の上で感じていました。そこに B がやってきたことで、“友だちが来たから滑ろうかな” “それとも座っていようかな”と考えているようでした。そして、1 歳児なりに、友だちが来たから滑らないといけないなあという気持ちになったようです。



環境構成の工夫

1 歳児は自分の思いを十分に言葉で伝えられず咄嗟に手が出てしまうこともあるので、一人ひとりに合わせた見守り方や援助をしています。また、保育者が子どもの思いや気持ちを代弁したり友だちのよいところを言葉で伝えたりしながら、自分と友だちの違いに気づき興味をもってかかわれるようにしています。この場面では、相手に対して互いに心地よいかかわりをしようとしている姿を見守りました。



わらべうた『大波小波』を歌いながらバスタオルに子どもたちを寝かせ触れ合い遊びをしました。初めて遊んだ時には、「やらない」と遊ばずに見ていた子どもや、緊張からか体に力が入っている子どももいましたが、回数を重ねるごとに楽しみ、バスタオルに身を預けるようになってきました。また、「楽しい」「またやりたい」「気持ちがいい」と、喜ぶ子どもの姿も見られました。

子どもたちが、楽しかった経験を人形を使って再現して遊ぶようになりました。それぞれが抱いていた人形をバスタオルに乗せ、歌を歌いながらバスタオルの両端を持とうとしますが、端まで手が届きません。また、バスタオルを両手で持つと、立ち上がれず思い通りにいきません。「誰か手伝って～」と、保育者や友だちに助けを求めました。

保育者が、「友だちが困っているよ」と周りの友だちに声をかけると、たくさん子どもたちが集まってきました。それぞれがバスタオルの端を持ち、「大波～小波～大きい波がやってきた～」と、赤ちゃんをあやすように歌いながら、人形が「泣いていないかな?」「笑っているかな?」と覗き込む表情は、自分たちがいつもしてもらっている保護者からの愛情そのままを表した姿だと感じました。



学びのポイント

クラス全員が経験した遊びということもあり、共通のイメージをもって、人形に優しく接したり愛情をもって声をかけたりする姿が見られました。また、保育者や友だちと一緒に遊ぶことで、かかわりが広がりました。助けを求めた子どもたちにとっては、すぐに友だちが来てくれて友だちの優しさにふれ、安心できる仲間と一緒に遊びを楽しむことができました。



環境構成の工夫

子どもたちが思わず口ずさみたくなる歌や身近にあるバスタオルを使って、保育者がモデルとなり、子どもたちと一緒に遊びを楽しみました。また、子どもたちが模倣して遊べるように、バスタオルを準備しておきました。子ども同士や人形への優しいかかわりを認めながら、友だちの思いに気づいたり一緒に心地よく生活できるように援助しています。



ダンボールなどを使って電車ごっこを楽しんでいた子どもたち。画用紙の端紙と段ボールをセロハンテープで貼り合わせたものを持ってきて、A「先生、信号」と見せてくれました。保育者「よく考えたね。ほんとだ、信号だ」とすると、興味をもったBがやってきて、B「棒がいるんちゃう？」と提案します。保育者が棒を用意すると、ガムテープを使って2人で信号を完成させ、協力してワゴンに貼りつけました。そして、信号をどこに置くのがいいか、保育者も一緒に加わって話し合い、置く場所を決めました。

A・Bは信号のそばで電車が来る様子をしばらく見ていました。電車を走らせていた子どもたちが信号を見つけると、「今、青」「あっ、赤になった」と、信号を見て遊び始めました。

信号に気づかずに電車を走らせることに夢中で遊んでいる子どもたちもいます。保育者が「黄色ですよ、赤になりました」と信号の横に立って声をかけると、運転手の子どもがピタッと電車を止め、保育者が次に「青です」と言うのを待っています。保育者がその場を離れると、代わりにAが信号の横に立ち、A「赤」と声をかけ始めました。Aの声を聞いて電車の子どもたちは止まり、Aの「青」の声でまた走り出しました。

💡 学びのポイント

A・Bはつくった物を遊びの中に取り入れてもらったことに喜びを感じ、遊びの楽しさを味わっていました。保育者からAに代わっても、子どもたちはAの声に動きを合わせ、止まったり進んだりを繰り返していました。遊びの中でルールが生まれ、そのルールを守ることで楽しさが増していきました。

👍 環境構成の工夫

端紙やセロハンテープ、ガムテープなど、保育室にあるものをいつでも使える環境が、自由な発想や工夫、協力を生んだと考えます。しかし、3歳児だけでは完成まで近づけません。子どもたちの主体性を大切にしながら、保育者は遊び方を提案したり一緒に遊びを楽しんだりすることで、ルールを守るやりとりに発展していきました。



トロッコをつなげて引っ張る子どもたち。
A「ひも（ロープ）をちゃんと前のタイヤにひっかけないとつながらへんで」 B「6台つなげても、動くかな？」 C「Cは、力持ちやから一人で大丈夫！」と言いながら、C一人で挑戦するものの、10人以上が乗ったトロッコはびくともしません。

「そうや！スケーターで引っ張るわ！」と、Dが何かひらめいたようです。そして、ワクワクした表情でスケーターを勢いよくこいで戻ってきました。D「ひもをここ（ハンドル）につなげて、こぐねん」と言いながら、後ろで動くのを待っている友だちの期待に応えようと奮闘しています。連結ができ、いざスタート！しかし、全く動きません。

動かないトロッコに落胆する暇もなく、力自慢のCが声をあげます。C「Dちゃんの後ろから引っ張るわ！」 E「私も手伝う」とトロッコから飛び降りEがCの背後に回り腰を持ちます。F「うんとこしょ。どっこいしょ。みたいやな～」

みんなの力が合わさり、トロッコは少しずつ前進していき、進むたびに歓声があがっていました。

💡 学びのポイント

友だちと誘い合って、遊びに使いたいものを用意してイメージを共有しながら遊んでいます。トロッコが動かなくなると、次の手段を考えていました。おそらく、スケーターはスピードが出る乗り物と理解しているのでしょう。引っ張る力をスピードで補えるのではないかと考えたものの動きませんでした。引っ張る力が足りないことに気づき、困っている友だちを助けようとする思いやりの気持ちを感じました。

👍 環境構成の工夫

体育倉庫から遊具や用具を取り出せるように整頓し、絵で表示することにより、子どもたちがやりたい遊びを自分で選べるようになりました。子どもたちが考え出した遊びを見守り、「うまくいかないかもしれない」と感じるようなことでも答えを先に出さないように心がけました。そうすることで、自分たちでより遊びが楽しくなるように力を合わせる姿へとつながっていきました。



うんていの上に立ってみたり、セーフティマットに向かってジャンプしたりして、サルごっこを楽しんでいた子どもたち。

ある日、Aが「もっと面白いことしたいなあ！」と言って、倉庫から縄を持ってきてうんていに吊るし、ブランコをつくりだしました。周りで遊んでいた子どもたちも興味をもち、「ブランコやりたい！」と、つくりました。ブランコに加えて綱渡りも増え、「なんかジャングルみたいやなあ！」と、サルごっこの遊びがさらに盛り上がっていきます。

遊びは楽しく展開していったものの、うんていでは他の遊び方をしている子どももいて、危険を感じることがありました。そこで、保育者「ブランコで遊ぶの楽しいけど、違う遊びをしている友だちは危ないかな？」と問いかけると、子ども「ジャンプする人の首とか足とかに引っかかって危ない」「じゃあうんていの端っこでしたら邪魔になれへんのちゃう？」

ジャンピングは真ん中、ブランコは端と遊ぶ場を区切って、子どもたちなりに安全に遊べる方法を考えてみましたが、それでは、うんていを渡る友だちが遊べなくなってしまいます。その状況を子どもたちが知ると、「他に吊るせるとこないかな？」と、園庭内で別の場所を探し始めました。B「ここ(太鼓橋)ぶら下げてみよっか」 C「ここやったら邪魔にならへんな」 D「赤い鉄棒はー？」 E「ここちょうどいいな。小さい組さんでもできるんちゃう？」と、みんながやりたい遊びを楽しめるように考えることができました。



学びのポイント

スリルを味わいながら楽しくチャレンジして遊ぶ中にも、危険につながることを子どもたちなりに予測し、安全に遊べる方法を考えていました。自分たちだけが安全に満足して遊ぶのではなく、遊ぶ空間を共有している周りの友だちにも目を向けて、違う遊びをしている友だちの側ではひもを吊るさないようにしたり、年下の友だちでも乗れるようなブランコづくりをしたりしていました。



環境構成の工夫

様々な運動遊びに果敢にチャレンジする子どもたちが、自分たちで思いついた遊びをより楽しく展開していけるように、子どもたちと一緒に話し合い、試しながら安全に遊べる環境づくりをしていきました。他クラスの友だちと共有している園庭なので、遊び方を全体で共通理解したり、子どもたちが危険な遊びをしていないか見守ったりしました。今までの経験から、みんなで楽しむためにはどうすればよいか考える中で、思いやりの気持ちや遊びのルールに気づくきっかけとなりました。



社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼保連携型認定こども園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。





食事準備ができるまで気分転換に園内を散歩しました。

職員室の前まで来たところで事務員さんに「おもしろいものがあるよ！」と声をかけられ、農園で収穫したキュウリとピーマンを見せてもらいました。大きく育ったキュウリと赤と緑になったピーマンを二人とも不思議そうな顔で見えています。食べられるものということは分かっていない様子ですが、調理する前の野菜に触れる機会はなかなかないので、そっと触ってみるように伝えてピーマンを手渡すと、恐る恐るといった様子で手に持ち、じっと見ていました。

小ぶりのピーマンを手にギュッと持っていたので、「保育室に持って帰ってもいいよ」と言ってもらいましたが、持ち帰ってもっと見たいという気持ちにはならなかったようで、事務員さんに返していました。

食事までの待ち遠しい時間、職員室で事務員さんに声をかけてもらったことで、調理前の野菜と出会うことができました。



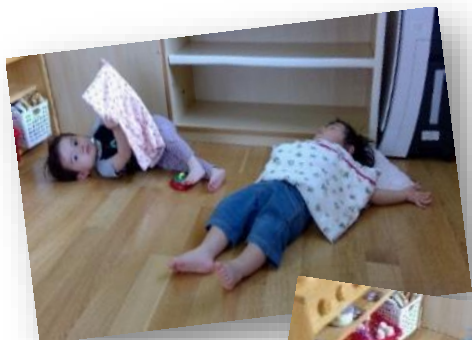
学びのポイント

この時期の0歳児は、人見知りをする子どもが多く、担任以外の大人とかかわることが他の年齢に比べ少なくなります。立ち寄った職員室で“これなんだろう”と思った興味あるものを通して、事務員さんとも交流をもつことができました。



環境構成の工夫

0歳児は特定の保育者との安定した関係を基盤に、徐々に周囲の大人や友だちへと関心を広げ、働きかけていきます。園内には、子どもたちに愛情をもって声をかけてくれる担任以外の大人が多くいるので、積極的にかかわりをもつようにしています。



少しずつ園での生活に慣れてきた子どもたち。不安いっぱいだった春とは違い、保育者から離れて遊べるようになり、友だちにも興味・関心をもつようになってきました。

給食前に、少し眠くなってきた A は、ままごとの人形用の布団をひっぱりだし、それを枕にして寝転がりました。するとそれを見た B が、もうひとつ布団を持ってきて「自分も!」と、お腹に布団をかけて隣に寝転がります。それを見た A も真似をして布団をお腹にかけます。他の子どもたちも続々と真似をして、その後は遊びの中で“ねんねブーム”が広がりました。

また別の日、A が寝ていると、B は保育者がお昼寝時にしているように、A の背中をトントンとリズムよく撫でて寝かせてあげる真似をしていました。

その日はそれがとても楽しかったようで、A と B は何度も交代しながら、お互いに寝かせ合いごっこを楽しんでいました。それから“ねんねブーム”は続き、友だちだけではなく、人形を寝かせるごっこあそびも楽しめるようになっていきます。



学びのポイント

友だちに興味・関心が出てきたことで、友だちのしぐさや行動を真似て同じように遊ぼうとし、友だちと簡単なごっこ遊びをするようになりました。また、自分が昼寝の時に優しく接してもらっている経験を遊びの中に再現して楽しんでいます。



環境構成の工夫

日頃から保育者との 1 対 1 のかかわりや触れ合い遊びを取り入れ、愛着関係を育み、子どもの心の安定を図ってきました。保育者との温かい関係のもと、友だちがしていることに興味をもち、友だちと一緒にすることが楽しいと感じるようになっていきます。身近な人とのかかわりの中で安心感をもち、人とかかわることの心地よさや楽しさを感じることで、自分から周囲へかかわっていくようになっていきます。



園庭の玩具入れのカゴを持ち、カゴの中に型抜きやスコップ・コップなど、たくさんの玩具を入れ始めた子どもがいました。「何してるの?」と聞くと、「お買い物してるねん!」と答えたため、違う種類のカゴをレジに見立てて「いらっしゃいませー」「レジありますよー」と保育者がお店屋さんになりました。すると、「すいませーん!これくださーい!」とやってきたので、「ピッ!100えーん!」とレジをすると、スーパーごっこが始まりました。

「ありがとうございました!また来てくださいねー!」と遊んでいると、その様子を見ていた他の子どもたちも、次から次へと色々な玩具を持って来ます。「すいませーん!これくださーい!」と、遊びが広がっていきました。

「A もやりたい!」とお店屋さん役になりきる子どもも出てきて、子ども同士でやりとりが始まりました。「B もやる!」とレジが2人体制になり、「ピッ!」「1円です!」「ありがとうございましたー。また来てくださいねー」とやりとりも上手になっていきました。「A ちゃん、この前スーパー行ったねん!」と自分の経験を話しながら、見たことや経験したことをイメージして、お店屋さんになりきったり、お客さんになりきったりして、スーパーごっこを楽しんでいました。



学びのポイント

保育者が店員になってレジをしたことをきっかけに、お店の人やお客さんになりきって、身近な生活の中で自分が経験したことや見たことを活かして遊んでいます。お金を払って商品を買うというやりとりを保育者や友だちと楽しみました。



環境構成の工夫

買い物を楽しくめるようにと違う種類のカゴを用意してレジをつくったことで、遊びが広がりました。玩具を入れるカゴに買い物カゴを使用していたので、子どもにとって買い物というイメージにつながったようでした。保育者が仲立ちとなって遊びが広がり、周囲の友だちとのかかわりへと広がっていきました。



自分たちでつくったお店屋さんで、ジュース屋さんやアイス屋さんをしていたある日、Aが家から卵パックを持って来ました。それを見たBが「たこ焼き屋さんやろう！」と言って、アイスをたこ焼きに見立てて遊び始めました。

C「たこ焼きって、そんな色じゃないで。(クリーム色の机を指して) こんな色やで！」 B「そっか。じゃあつくろう」と言って、クリーム色の花紙でたこ焼きをつくり、できたたこ焼きを卵パックに乗せて焼いています。 D「油がない！」 A「青のりパラパラってしたいな～」 E「たこ焼き、こうやって回すやつがいる！」 B「あ！いらっしゃい～って頭につけるやつつけたら、お客さんいっぱい来てくれるかな？」と、たくさんのアイディアが出てきました。

話し合いの時間、たこ焼き屋さんの遊びをみんなで共有した後、「どんだたこ焼きつくろう～！」と、みんなで考えました。そして、たこ焼きをつくる人、ソースをつける人、ねぎを振りかける人などそれぞれやりたい役になって、たこ焼き屋さんのオープンに向けて準備をしました。たこ焼き屋さんがオープンすると、F「たこ焼き、何個いりますか？」とお客さんの注文を聞き、一生懸命数えて提供する姿も見られました。

💡 学びのポイント

A が家から卵パックを持って来たことから、子どもたちはすぐにたこ焼きを連想して遊び始めました。家庭での経験を思い出して、たこ焼き屋さんには何があるのか意見を出し合い、より本格的なたこ焼き屋さんに近づけようとする姿がありました。

👍 環境構成の工夫

子どもたちのやりたいことを実現できるよう、遊びに必要なものを伝え合いみんなで共有できる機会を設けました。また、必要なものをできるだけ自分たちでつくっていけるように、材料を準備したり、安全につくれるように環境を工夫したりしました。そして、子どもたちが自信をもって自分たちのつくった店屋のやり取りを楽しめるように、保育者も客として遊びに参加しました。



段ボールを使って自動販売機をつくって遊んだ経験から、「もっと何かを作りたい！」とお家づくりを始めました。最初は、段ボールをそのままの形で『布団』や『玄関』に見立てて遊んでいましたが、次第に段ボールを切ったりテープで貼ったりしてつくりたい物をイメージしてつくり始めました。

「やっぱりトイレいるよな」の言葉をきっかけに、トイレづくりを始めると、「扉いるよな」「座るところ（便器）もいるで」と知っていることを伝え、友だちと工夫してつくっていきます。「トイレのマークなかったら何かわからんやん」「トイレのマーク見に行こう」と本を探しにいきました。マークを見つけると、「僕、描ける」「紙とペン取ってきたわ」と、必要な物を準備してトイレマークを描き、扉に貼りました。

保育者が「お家にあるもの他に何かあるかな？」とつぶやくと、「あ！テレビ！！」「ほんまや、それ絶対いるよな」と段ボールを持ってきます。段ボールを四角くくりぬき顔を出し、友だちと顔を見合わせて笑い合っていて楽しんでいます。

「天気予報です。明日は雨です！4チャンネルやで」と言って遊んでいたのも、保育者が「他にチャンネルありますか？」と聞くと、「あ、ピッてるやつつくらな」「あー、リモコンやろ！つくろう」とつくり、「はい、これで変えられる」と保育者に手渡してくれました。「ピッ」とボタンを押すと「今はコマースシャルでーす」と言って歌を歌ったり、「ニュースです。大変なことがありました。」と絵本を原稿に見立てて読む真似をしたり、「お笑いです」と友だちと動きを合わせネタを披露していました。「少々お待ちください。」とチャンネルごとに話し合いながら、番組を考えて楽しんでいます。

💡 学びのポイント

普段の生活と遊びが結びつき、友だち同士でイメージを共有しやすかったため、遊びが広がっていきました。生活の再現遊びを楽しむ中で、保育室にあるおもちゃや段ボール、身近な材料を使って、工夫したり考えたり試したりしながら、必要なものをつくっていきました。また、生活の中で知った情報を活用し、友だち同士で伝え合ったり気持ちに共感し合ったりすることで、他者とのかかわりが広がっていきました。

👍 環境構成の工夫

保育者も遊びに入り、一人ひとりの発想を受けとめたり会話をつなげたりしてやりとりを楽しみ、イメージを広げていけるようにしました。子どもの思いが形になるように、大きさの違う段ボール、セロハンテープやガムテープ、段ボールカッターなどを準備するとともに、道具の使い方を知らせ、遊びの中で使う経験ができるようにしました。



2学期の始業式が始まる前のおはようタイムで、保育者が始業式について話をしました。

保育者「夏休みの前は1学期。そして今日から2学期が始まります。」 A「2学期って何？」
保育者「9月から12月のことを2学期って言うんだよ。こども園になって、学校みたいになってん。学校にもあるよ。」 A「へー！学校と一緒になんや！」 B「学校と一緒にやったら覚えとかなあかな！」

保育所から来た2号認定児の子どもたちにとっては馴染みのない言葉でしたが、「小学校と一緒に」という言葉を聞いて、学期について興味をもったようでした。

その後出席した始業式でも、園長先生から、2学期とは何かということや、2学期の行事の紹介などをしてもらいました。みんな真剣に話を聞いていました。

学びのポイント

こども園では3学期制を導入しているため、始めて経験する子どもたちが戸惑わないように、丁寧に話をすることにしました。また、イメージが沸きやすいように小学校を例に出したことで、就学に対して興味・関心を抱き、小学校の仕組みについて知ろうとする機会になりました。

環境構成の工夫

小学校に散歩に行ったり小学校のプールでプール遊びを楽しんだりすることで、子どもたちの中に、小学校への就学が具体的なイメージとなってきています。就学への期待をもちつつある時期だったので、小学校と同じように「学期がある」ということが、子どもたちの興味・関心につながったようでした。保育活動の中でも、給食後に机や床を雑巾を絞って拭いたり机と椅子を用いて活動したりなど、小学校の生活に似た経験を取り入れ、徐々に就学への期待を高めていきたいと思います。



思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。





コンビカーで遊んでいたA。保育室内でコンビカーを押しながら歩くことを楽しんでいます。

しばらくすると壁にぶつかりそれ以上進めません。どうするのだろうかと様子を見てみると、初めはコンビカーを押し続け「んー！！！」と前に進めずイライラした様子でした。

そこで保育者が前からそっとコンビカーを押してみました。するとAも保育者と一緒に前に来て、コンビカーを押したり引いたりする遊びに変わっていきました。

遊んでいるうちにコンビカーの方向が変わりまた押して歩けるようになったのですが、それには気がついていません。しばらくの間、コンビカーを押したり引いたりして遊んでいました。

その後、ふとした拍子に、コンビカーの方向が変わったことに気づいたA。すかさず後ろの持ち手の所に行き、再びコンビカーを押して歩き始めました。そして何度も楽しむうちに、段々と方向を変えるコツをつかんできたようで、室内をグルグルとコンビカーを押しながら歩いて探索することを楽しんでいました。

💡 学びのポイント

押して遊ぶことが楽しいAは、まだ進む方向を変えることができません。進めなくなっても、あえて保育者が向きを変えず、子どもがコンビカーにどのように働きかけるのかを見守りながら、一緒に遊びました。繰り返し遊ぶ中で、車の向きを変えたと進むことに気づきました。

👍 環境構成の工夫

コンビカーでの探索を楽しめるように、玩具を片づけて遊びスペース全体を歩けるようにしておきました。また、Aだけでなく他の子どもにも興味に応じて遊べるように人数分のコンビカーを用意し、好きなものを選べるようにしました。



多目的室で、幼児と一緒にマグネットブロック同士をくっつけて遊ぶことを楽しんでいたため、保育室でも遊べるようにしました。すると、子どもたちは興味津々で、ブロックをくっつけたり離したりして、くっつく感覚を味わっていました。



そんな中、一人の子どもがブロックを持ち出し、何気なく壁につけると貼りつきました。子どもは「あ！」と驚き、保育者に向かって笑顔を見せます。保育者は「わあ！くっついたね！」「すご〜い！」と発見したことや、驚きや喜びに共感してみせました。

その様子を見た他の子どもたちも、壁の方へ集まってきました。そして、みんなでブロックを壁に貼りつけて遊び始めました。次第に、動物や乗り物をイメージしてブロックを並べるようになり、「でんしゃ！できた！」「せんせい、あおむし！」と喜んで知らせる姿が見られました。月齢の高い子どもは、四角や三角のブロックを立体的に組み立て、「先生、見て。ペンギンさんできた〜！」と、つくったものをペンギンに見立てて遊んでいました。

💡 学びのポイント

ブロック同士をくっつけたり離したりしているうちに、くっつく場所やくっつき方に気づき、壁にくっつけたりブロックをたくさん重ねたりしながら、繰り返し遊んでいました。さらに、壁に貼って形を組み合わせたり、立体的なものをつくったりしながら、何かに見立て様々な遊び方を楽しんでいます。

👍 環境構成の工夫

ブロックを積み重ねたり並べたりして子どもが遊びやすいよう、机を準備しておきました。また、保育室の壁の一面が磁石になっているので、壁に貼って遊べるよう壁の近くに玩具を用意しました。保育者が子どもたちの思いや発想に共感しながら、自分たちで組み立てる楽しさを味わえるように援助しました。



太陽の日差しが強くなり、水を出すと喜んで触ったりすくったりして楽しんでいます。この日は泥んこ遊びをしようと全員で裸足になり砂場で遊んでいました。

ホースから直接水を触り、「冷たいね。」「気持ちいいね!」と言う子どもたち。バケツの中に手を入れ、じゃぶじゃぶ洗ったり、バケツいっぱい水を汲み、流したり運ぼうとする姿も見られます。

するとAが、「これに水入れてみるわ!」とザルを持ってきました。そこに水を入れてみると、するすると下から水が流れ出ます。それを見たAは、「えー! なんで?」とびっくりしたような表情をしていました。他の子どもたちもやってきて、「すごい! もっかいやってー!」と言うので、保育者がもう一度水を流し入れると、「すごいなあ」「面白いなあ!」と下から流れる様子を楽しんで見えています。

見ているうちに、ザルでは水がすくえないということが分かったようで、今度はバケツを持ってきました。「ここに水入れて」とのリクエストに保育者がバケツに水をいれ、今度は溜めることができました。その後も、バケツに水を汲み入れ、水や泥の感触を楽しんで遊びました。



学びのポイント

水を溜めて感触を楽しんでいる中で、ザルにはバケツのように水が溜まらないことに気づき、その不思議さを友だちと共有しました。また、ザルから水が流れ出ることを「もっかいやってー!」と、何度も試して確認する姿が見られました。



環境構成の工夫

気候の良い時期には、水や泥の感触を存分に楽しめるようにしています。汚れても気にせず思い切り砂や水の感触を味わって遊べるように、着替えて裸足で遊んでいます。また、子どもたちが砂や水と様々にかかわれるように、バケツやザルなど用途の異なる用具を準備し、自由に使えるようにしています。



赤ちゃん人形を抱っこしながらご飯をつくっていたB。 A「赤ちゃん、火の近くあぶないで」 B「でも赤ちゃん座るところないやん」 A「赤ちゃんも一緒に座ってご飯食べたいな～」 保育者「どうする？」 A「椅子つくったらいいな」

・・・ということで始まった赤ちゃんのイスづくり。牛乳パックをセロハンテープで貼ってつなげようとはしますが、動いてしまいます。

A「ここ持っというて」 C「これでいい？」Cに押さえてもらい、あちらこちらにテープを貼っていきます。しかし、くっつけたい部分にテープが届いておらずくっつきません。「あれ？なんで？」と試行錯誤しながら、もう一度その近くにテープをつけていきます。そして、ついに「くっついた」「できた！」と嬉しそう。

ところが、実際にテーブルのところに置くと、イスの高さが全然足りていないことに気づきます。

A「めっちゃ、イスちっちゃい！」「もっとつけなあかん」と、牛乳パックをつなげては机のところへ持って行き高さを確認してみます。それでも高さが足りず、また牛乳パックをテープでつなげるということを何度も繰り返し、やっと完成させることができました。

💡 学びのポイント

イスをつくるためにはどのような材料が必要か考え、牛乳パックを選んでつなげていました。また、どうすれば牛乳パックをつなげる際に動かないのか、どの部分にテープをつければくっつくのかと、友だちと考えてつくる姿が見られました。そして、牛乳パックでつくったイスを机と並べ実際に置いて見たことで、イスが机の高さに合わないことに気づき、再度、牛乳パックをつなぎ合わせ何度も机と比べながら高さを調整していました。

👍 環境構成の工夫

子どもたちがいつでもつくりたいものをつくれるよう、廃材や用具を準備して環境を整えています。また、友だちと工夫しながらつくる姿を見守り、子どもたちが思いついたことに対して、タイミングを逃さずどうすれば良いか問いかけ、考えたり工夫したり出来るような言葉かけや援助をしていきました。



Aが黙々と石鹸を泡立てています。保育者「何をつくっているの？」 A「ジュース！」 保育者「何ジュース？」 A「コーラ」 保育者「炭酸の泡がいっぱいで美味しそうだね」 Aは色水と泡を組み合わせ、ジュースづくりを楽しんでいます。 A「明日も続きするねん」と泡をペットボトルに入れて置いています。量が増えてくると大きいペットボトルに移し替え、何日か繰り返して遊んでいました。

ある日、Aが昨日つくった泡をペットボトルから出しました。A「見て～トロトロやー」 B「うわ～！すごいな」 保育者「山芋みたいやね。何でこんなにトロトロなったんやろ？」 A「置いといたからかな？」 保育者「そうか。置いてたらそうなるねんなあ」

話し合いの時間に、Aがトロトロの泡のことを伝えました。A「今日はトロトロ泡ができてん」 B「あー！僕見たで」 保育者「どんなだった？」 B「めっちゃすごかった」 C「私も見たい」 A「後で見せてあげる」 D「どうやってつくったん？」 A「前からつくってた泡をペットボトルに入れて置いといたらなるねん」 E「へえーそんななるんや～！」 D「僕もそれやってみたいわ」

保育者「そしたらまたA先生に教えてもらおうか」 A「いいよ～！」

後日、E「僕も入れて～！」 A「いいよー！」 D「これどうすんの？」 A「ここに水入れて・・・ストップ！」 Dは言われた通りに水を入れます。 D「これでトロトロのんできるん？」 A「そうやで」 D「Aすごいな！」 Aは友だちに認めれたことが嬉しくて、その後も教えたり一緒につくったりする姿が見られるようになりました。



学びのポイント

毎日つくった泡を継ぎ足しながら置いていたので、泡がトロトロに変化し、その泡の質の違いに気づきました。偶発的にできたものでしたが、Aなりに仮説を立て、なぜ変化したのかを考えていました。Aの発見を話し合いの場で伝えたことで他児も興味をもち、Aに泡をつくるコツを教わりながら一緒につくっていました。



環境構成の工夫

つくった泡を残しておけるようにペットボトルを用意し、自分のマークシール付きの洗濯ばさみで印をしました。遊ぶ時にはボウルに移し替え、遊びの続きができるようにしました。また、遊んでいる中で気づいたことや発見したことに保育者が寄り添い、言語化することで、話し合いの場では自分の言葉で友だちに伝えることができました。



A と B が机の天板を挟んで磁石が動く事を発見したことから遊びが始まります。 B「うわー動く！」 C「不思議やな」何度も繰り返して遊んでいるうちに、磁石を使った追いかけてが始まりました。



次の日、大きな紙とペンを用意しました。保育者「道を書いてもいい？」 B「うん」子どもたちはその道の上を磁石で通ろうと一生懸命です。 D「道、書いていい？」 B「いいよ」道が迷路のようになっていきました。周りには花や車を描く子どももいます。だんだんと磁石遊びをする子どもが多くなっていきました。

D「あれ？磁石が逃げていく」 C「おもしろい！待て待て！」磁石が反発する力を利用して、追いかけても始まりました。

数日後、いつものように磁石遊びを楽しんでいた A は磁石を落としてしまいました。すると、その磁石が机の脚にくっついたのです。 A「うわ！！」角度を変えてつけてみます。 C「見て見て！！これでもくっつくよ」磁石のふち同志をくっつけています。保育者「長くつなげられる？」 C「うん。ゆっくり、、、ゆっくり、、、あー！！」すぐに面で重なってしまう磁石をふちでつなげようと、何度も挑戦しながら楽しんでいました。

💡 学びのポイント

今までの経験から、磁石がくっつくものであることは分かっていましたが、机の天板を挟んでもくっつくことや磁石同士が反発することを知り、その性質を利用して新しい遊び方を考えました。遊びの中で偶然起こった現象に驚いたり不思議に感じたりしながら、磁石の多様な性質を体感していました。

👍 環境構成の工夫

磁石遊びにじっくり取り組めるように、場所や時間を十分に確保しました。また、磁石の性質を利用して迷路の遊びが始まればいいと思い、白い大きな紙とペンを用意しました。さらに、磁石のおもしろさを友だちと一緒に味わい、簡単なルールのある遊びへ広げられるように、磁石をたくさん準備しました。



自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもって関わるようになる。





初めてバギーから降り、砂場に座ったA。眉間にしわを寄せ、手や足に触れる砂を見つめています。保育者がそばで、さりげなく砂に触って見せました。

同じようにAも指で砂をつまんでみます。だんだん、気になり、顔が砂に近づいていきます。その様子を見て、保育者が「お砂、気持ちいいねー」と言葉をかけました。

Aは掌全体で砂の感触を楽しみ始めます。砂を握っては落としたり、掌に乗った砂を見つめ、指で触ってみたりします。保育者は、Aが砂とかかわる姿を見守ります。

次に、Aは近くで2歳児がさら砂作りをしているバケツの中の砂にも興味をもち、近づいていきました。そして、バケツの中の砂を触てみます。

ついには、口に入れてしまいました。



学びのポイント

初めて触れた砂は、Aにとって未知の物体です。今まで経験したことのない感触に不安を感じ、眉間にしわを寄せていました。傍らで信頼している保育者が砂に触っているのを見て、少しずつ興味をもち始め、そっと手を伸ばし感触を味わい始めました。指先から掌、足、ついには口まで…。全身で砂の感触を感じる経験となりました。



環境構成の工夫

初めて出会った砂の感触に驚き不安を感じていましたが、傍らで、信頼する保育者がモデルとなり、砂に触る姿を見せることで、安心して興味をもち始めました。Aが、砂とかかわる姿を見守り、十分な時間の保障をすることで、じっくりと試すことができました。また、異年齢の友だちが砂を使って遊んでいる姿は、興味・関心が高まる刺激となり、積極的に自分からかかわっていこうとする姿につながりました。



A が小さな虫を見つけて、スコップに入れ、「むしー」と言って B に見せます。その虫はダンゴ虫やアリなどの絵本に登場するような虫ではなく、おそらくユスリカという蚊の幼虫です。B も「見せて」「どこ？」と興味津々の様子で、2 人で見合いっこしています。



スコップの中では砂と混ざって見えにくかったのか、平たい大きなお皿に移して観察していました。B は「むしおった」「ちっちゃ」と言いながら、触ろうとします。A は虫には興味がありますが、触るのは苦手で友だちの様子を見ています。

B がもっと近くで見てみようとして、虫を手に乗せて観察し始めました。手の上で虫が動くと「動いた」と言って喜び、落ちないように両手で持ちます。じっと観察している B のところに C が「見せて」とやって来たので、虫を潰さないようにそっと渡していました。



学びのポイント

「もっとよく見たい」「どうしたらよく見えるのか」という思いから、器を小さいものから大きいものへと移し替えたり、小さな虫を潰さないように掌に乗せたりと、自分で考えて行動していました。また、潰さないように虫を扱っている姿からは、生き物に優しく触れようとする気持ちの芽生えが感じられました。



環境構成の工夫

危険な虫がいないか安全確認をしたうえで、色々な樹木や花を栽培し、虫たちとの出会いの場をついています。子どもたちが自由に観察できるように、手の届くところに様々な器やスコップ・虫かごなどを用意しました。A の発見が周りの友だちの興味につながるように、保育者は側で様子を温かく見守っています。

2歳児

生き物大好き

～身近な生き物と触れ合うなかで命を大切にする～ 令和元年6月～



園内で出会う様々な生き物との触れ合いを通して、かかわり方に気づいていく過程の2歳児。園庭で見つけたカエルをギュッと握ったり、砂の中に埋めたりする姿があったので、保育者がかかわり方を折に触れて伝えていきました。すると「カエルさん大丈夫かなあ」という言葉が聞かれるようになりました。

6月の誕生会で、ザリガニとカエルが登場する人形劇を見たことがきっかけとなり、飼育しているザリガニの動きのおもしろさに、子どもたちが興味を示しました。そこへ5歳児が通りかかり「ザリガニは怖かったら隠れるねん」「後ろ向きに歩くねん」と教えてくれました。ザリガニの動きを模倣して楽しみ、表現遊びや運動遊びにつながっていきました。

散歩や園内で見つけたバッタも、最初は強く掴んでいましたが、徐々に優しく持つようになっていきました。捕まえても「お家に帰してあげよう」と逃がしたり、オンブバッタが別々になると「ママのところにかえしてあげる」と跳んで行ったバッタを必死で探す姿もありました。



学びのポイント

友だちや保育者と一緒に生き物を見たり触れたりする中で、生き物へのかかわり方を知り、大切にしようとする気持ちを育てていきます。偶然通りかかった5歳児の言葉がきっかけとなり、より深く興味をもつようになりました。生き物の特徴や動きを真似して遊ぶことで、より身近に親しみを感じるようになります。



環境構成の工夫

生き物を飼育するときは、なるべく多くの人が見られる場所を選んでいきます。発見や知識を友だちと共有できるようにとの思いからです。絵本や図鑑などをいつでも見られるところに置き、より興味・関心がもてるようにしました。散歩に行く機会を増やし、より多くの生き物に触れられるように心がけました。その中で、保育者が生き物とのかかわり方のモデルとなるように接することで、生き物へのいたわりの気持ちが育まれるようにしています。



クラスで飼っていたカブトムシが動かなくなりました。虫が好きで、よくカブトムシを触っていた A に、カブトムシが飼育ケースで亡くなっていることを伝えました。

保育者「カブトムシ、死んじゃったね。どうしようか」 A「看護師さんに見せに行く！」保育者「どうして？」 A「だって看護師さんに診てもらったら元気になるから」

保健室に行き看護師にカブトムシを見せるものの、「死んでしまったから埋めてあげたらどうだろう？」と声をかけられ、土に埋めることにしました。

保育者「どこに埋めてあげようか？」やり取りを見ていた B が「お花のところに埋めたらいいと思う！」と花壇を指さしました。

そのうちクラスの子どもたちも集まってきて、スコップやシャベルで大きな穴を掘りました。保育者「土のおふとんかけてあげようか」 A「トントンしてるの」カブトムシをそっと穴の中に入れ、上から土をかぶせ、スコップでポンポンとおさえています。保育者「周りにお花をおいてあげたら、喜ぶかな？」 B「このお花とか可愛い！」 保育者「なんでお花小さくちぎるの？」 B「だってな、カブトムシさん出てきたら食べられるように小さくするねん。元気になってねっていうこと」

💡 学びのポイント

怪我をしたら保健室に行く、寝る時は先生が背中をポンポンしてくれる、ご飯を食べたら元気になるなど、自分の生活経験を結び付け自分なりに考えて行動していました。死とはどういうことかということについてはまだ理解が及ばないながら、大切なカブトムシが動かなくなったことは大変なことだと思い、どうにか助けたいという気持ちにつながりました。

👍 環境構成の工夫

保育室で飼育し、保育者が丁寧に生き物の世話をする姿を見せながらカブトムシを身近に感じられるようにしています。動かなくなったカブトムシを大好きな看護師に診てもらいたいという子どもの気持ちを尊重するなど、担任以外の人とのかかわりの中で感じることも大切にしています。生き物との触れ合いの中で死に関する経験も積みながら命の大切さに気付いていくことを願っています。



一人の子どもが家からアゲハの幼虫を持ってきたことがきっかけで、身近な生き物に興味をもつ子どもが増えました。園庭のキンカンの木でアゲハの幼虫や卵を発見！「育てたい」と飼育することになりました。パンジーにいたツマグロヒョウモンも飼育し始めました。

ある日、A がカブトムシの幼虫を持ってきて、いつ成虫になるのか楽しみにしていました。そこで、幼虫から成虫になるまでの様子を掲示したり絵本を読んだりして、今の生長過程がどこなのか分かるようにしました。



数日後、カブトムシが成虫になっているのを見つけました。B「見て～！カブトムシになってる」 C「これ雄や」 D「僕にも触らせて」 B「そこ持ったらあかん。角折れるで。ここ持つねん」 C「ここ歩かせてみようや」 D「すごい！綱渡り上手や。がんばれ～」と子どもたちは興味深々です。

すると、E が突然「水飲ましたらな！」とヨーグルトボトルの空き容器に水を入れて持ってきました。E「カブトムシ喉渴いてると思うから水飲ませてあげるねん」 B「家にカブトムシのゼリーあるから明日持ってくるわ」 D「そんなに触ってたらカブトムシ弱ってしまうで」

子どもたちは、カブトムシを思いやりながら大切にかかわっていました。

💡 学びのポイント

幼虫から飼育することで成虫になるまでの過程をじっくりと観察することができ、生命の誕生や生命の大切さを感じています。また、雄の特徴の角や、エサの必要性に気づき、自分の知っている知識を友達と伝え合うことで、より興味をもち生き物のことを知ろうとする姿が見られました。

👍 環境構成の工夫

子どもたちが身近に触れたり観察したりできるよう、手に取りやすい位置に飼育ケースを置くようにしました。興味をもったことや疑問に思ったことをすぐに調べられるように絵本や図鑑を準備するとともに、飼育する中で気づいたことをクラスの中で話題として共有しています。

5歳児

羽ぐちゃぐちゃなってるな

～ツマグロヒョウモンの飼育を通して～

令和元年4月8日～



数人の子どもたちが虫眼鏡を手にパンジーの周りに集まっています。ツマグロヒョウモンの幼虫を見つけ「毛虫！気持ち悪い～」と話しているようです。保育者が幼虫を手に取り、間近に見せたことをきっかけに関心をもって、みんなで育てることになりました。

パンジーの植木鉢を保育室前に置き、飼育を始めて2週間後、幼虫がサナギになりました。子どもたちは、好奇心からサナギに触れたり、引っ張ったりして感触や反応を試しています。

ある日、サナギの周りに子どもたちが集まり騒いでいます。「サナギから血が出てる！！」見ると、1匹のサナギが指で押しつぶされ、もう1匹は葉からちぎりと取られています。そこで、全員で考えあう機会と捉え、学級全体で話し合うことにしました。保育者「さっき、悲しいことがあってん」 A「チョウチョウの幼虫つぶれてたこと？」 子ども「え～！それはあかん！」保育者「どこがあかんと思う？」 A「悪いことだと思うから」 B「悲しいことやから？」 保育者「命を大事にできてないところがあかんと思うよ。みんなと同じようにサナギにも大切な命があるよ。みんな、サナギの命大事にできていたかな？」

1週間後、指でつぶされたサナギが羽化しましたが羽が広がりません。A「羽ぐちゃぐちゃなってるな・・・」 C「飛ばれへんのかな？」羽が広がらなかった理由は、サナギを大切にできなかったことが原因であると振り返り、チョウを花壇に返すことにしました。翌日も数人の子どもたちで花壇のチョウを見ている。C「昨日のチョウチョウおった！触りたいな～」 A「やめとき。花の中に隠れてるし、触られたら嫌かもしれんで」と、チョウの気持ちを考えて話し合う姿が見られました。

💡 学びのポイント

その後、同じような環境でアゲハチョウの幼虫を飼育し、大切に観察したので、世話をした幼虫を全て羽化させることができました。「どんなチョウになるのか知りたい」「育ててみたい」と、好奇心や探究心をもって生き物にかかわる過程で、潰してしまったり雑に扱ったりした自分たちの行動がチョウの死を招いてしまったということを身をもって知りました。羽が広がらず、飛べないチョウを見たことで生き物とのかかわり方を話し合い『命との向き合い方』を考えるよい経験となりました。

👍 環境構成の工夫

園内に季節の花や植物を植え、自然を身近に感じられるようにしています。また、虫眼鏡やミニ図鑑を準備し、虫や自然に関心をもてるようにしました。幼虫は、プランターで飼育することにより、自由に触れられより近くで観察できるようにしています。サナギとの関わり方については敢えて見守り、クラスで考え合う機会をもちました。



数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。





ブロックの型入れや木製の型はめで遊びながら、玩具自体の素材や感触を確認している様子の子のA。保育者が形の名称を知らせたり、色を伝えたりしながら一緒に遊ぶと興味を示しました。Aは、保育者の様子を模倣し、入れようとしますが、なかなか型にはまりません。それでも、満足し楽しんでいるようです。



保育者と一緒に繰り返すうちに、向きを変えると型に入ることに気づきました。保育者の声かけやヒントをききながら遊び、型に入ると嬉しそうな表情を見せるので、保育者も一緒に喜び気持ちを受けとめました。

やがてAは、一人で入れたいと思うようになり自ら型はめをしてみようとしませんが、なかなか形が合いません。何度も繰り返し行ううちに形が合い、「できた！」と達成感を味わっていました。



学びのポイント

0歳児は、身近なものを眺めたり、触ったり、なめたりと様々に試しながら興味・関心を高めていきます。手指の操作が巧みになってきたので、ブロックをつかみ操作することが出来るようになりました。保育者と一緒に同じ色や同じ形を合わせながら、次第に、色や形を認識し、自分なりに考えながら集中して取り組むようになります。



環境構成の工夫

子どもが興味をもったものを手の届く範囲に置き、集中して楽しめるように環境を整えました。保育者が一緒に遊びながら、色や形について声をかけたり、子どもが考えながら試している姿を認めたり考えているであろうことを言語化したりしながら、遊びを促しました。



A はじょうごにドングリを落とし入れて遊んでいます。2つのザルの真ん中にじょうごを乗せてドングリを入れ、どちらのザルに入るのかを楽しんでいるようで、ドングリの行方を追っています。ドングリは大きいもの（マテバシイ）と、小さいもの（シラカシ）を用意しましたが、じょうごの穴を通るものを選んだのか、小さいものを使っていました。

周りの友だちも興味をもって A のじょうごにドングリを入れます。A はその様子を自然に受け入れています。B がじょうごへ1度にたくさんのドングリを入れると詰まってしまいました。その様子をじっと見ていた A は、保育者が詰まったドングリを取り除いた後、1つずつ入れるようになりました。保育者がじょうごを支えると、A は真上からドングリの行方を見えています。

次に A は、ドングリをじょうごより上の方から落としてみました。勢いよく落ちる様子に興味をもち、何度も落とします。初めは座って落としていましたが、もっと高くなるようにベンチに膝立ちして落とす姿も見られました。

💡 学びのポイント

じょうごの穴を通すために小さいドングリを選んでいました。これまで、ぽっとな落としや型はめて遊んだ経験が生かされているように感じます。また、どちらのザルにドングリが入るか行方を追う姿は、今後、じょうごの位置や傾きによって転がる方向が変化するという気づきにつながると考えられます。より高い位置からドングリを落とすと、ドングリの落ち方に勢いがつくことに興味をもっていました。

👍 環境構成の工夫

子どもが散歩の際に拾ってきたドングリを、大小に分別して用意し、自分たちで使って遊べるようにしました。子どもたちが考えたり試したりしていることに共感し、一緒に遊びながらじょうごを支えるなど考えたことが実現できるよう援助しました。



＜図形＞

保育者が色々な形のカラーセロハンを窓に貼っておくと、真似して貼ってみようという姿が見られました。「ぼくのお家できた～！」と家をつくって楽しんでいました。

ある日、プールに浮かべて遊んでいた気泡緩衝材がタイルの壁に貼れることを発見します。しかし、気泡緩衝材には壁にくっつく面とくっつかない面があります。「どっちかな～？」「でこぼこしている方！」と友だち同士で教え合い「丸！くっついた！」「三角もくっついたで！」と貼ることを楽しんでいました。

＜数量＞

透明カップからペットボトルに水を入れていました。たくさんこぼれることは気にする様子もなく「いっぱいにするねん！」と何度も繰り返し、水が増えることを楽しんでいました。

そこで、じょうごを用意すると水をこぼさずに入れられるようになりました。こぼれそうになると「おととととと、ストップ！」と声を掛け合い、色水の量を調整して注ぐことを楽しんでいました。



学びのポイント

四角と三角で家にしたり四角と丸で電車をつくったりと、身近なものに見立てて遊ぶことを楽しんでいました。また、素材の特徴をとらえ、貼れる面と貼れない面があることに気づいていました。

透明カップやペットボトルの大きさや水の量の違いに気づきました。また、じょうごを使ったことで水が入れやすくなり、水の量を調整しようとする姿が見られました。



環境構成の工夫

三角や四角、丸といった様々な形のカラーセロハンを用意し、目のつく所へ貼ったことで遊びが広がりました。また、1つの素材だけでなく、カラーセロハンや気泡緩衝材、カラーポリ袋、スチレンボードなどの素材も用意し、子どもたちが選択しやすいようにしました。

量の違いに気づくように大きさの異なる容器を用意したり、水を移し替えやすいようにじょうごを用意したりしました。



近くのふれあいの森にドングリ探しに行くことにしました。ペットボトルの入れ物を持ち、行ったことがあるAとBの案内という雰囲気が出かけます。早速、「いっぱいある」「丸いのん見つけた」「これ、みかんみたいな形や」「これ、ウインナーやで」「バナナもある」などと身近な物に見立てて、ドングリを集めることを楽しんでいます。

「みんなこっちに大きいのんある」との声に集まっていった子どもたち。「すごい！大きい」拾ったドングリをペットボトルの口から入れようとしたが、口部分に詰まって入りません。「入れへん」「ほんまや、めちゃうちゃ大きいってことや！」と横から入れました。その後は、「これは入った。さっきより小さい」「これも入らへん。めっちゃ大きいな」などと嬉しそうに大きさを選別しながら集めています。小さいドングリも見つけ「これはスルスルスル～って入るで」と大きい・小さいを楽しんでいるようでした。他にも、「帽子かぶってるのんあった」「これ髪の毛ついてるみたいやろ」などと形を楽しんでいる姿も見られました。

帰園後、ドングリを広げ図鑑と比べながら、「一緒や」「これなんて書いてる？」と友だちと見ています。テラスでドングリを転がし、「めっちゃ転がる」「お山のところで転がそう」と今度は土山の上に行って遊び始めました。1個ずつ転がしたり、たくさんまとめて転がしたりしています。すると小さなドングリだけが山の上に止まったままになっていました。「この子怖いんかな？」「まだ赤ちゃんやからかな？」（ストライダーで滑る際に怖かった経験から）そこから「これは速く転がる」「これは転がらない」などと試し、「丸いのんの方がコロコロ転がるねん」と発見したことを嬉しそうに話していました。

その後は、すべり台の上からも転がし「ここの方がゴロゴロゴロ～って転がる」と喜んでいたました。

💡 学びのポイント

ドングリの形の違いに気づき身近なものに見立てたり、ペットボトルの口の大きさを基準に大小を比較したりしていました。様々な形のドングリを転がして試すことで、丸いものはよく転がり小さく細長い物は転がりにくいということに気づきました。

👍 環境構成の工夫

子どもたちの気づきや発見に共感したり、新たな気づきにつながるような言葉かけをしたりしました。また、思いついたことを試すことができる場所や、じっくりと取り組めるような時間を確保しました。



いろいろな素材でつくったカラフルな魚をたくさん釣っては、器をいっぱいにすることを楽しんでいました。やがて、たくさん釣るだけではなく、色を分けて釣ってみたり友だちと数を数えて競い合ったりするようになりました。

A「色分けてやろう！」 B「いいよ。じゃあピンク釣るわ！」 A「きみどりにするわ！」 B「どっちがいっぱい釣れるか競争な！よーいどん」 A「見て～こんなに釣れた！」 B「僕もいっぱい釣れた！数えてみよ！」2人で1, 2, 3…と数え始めます。数を数えてはたくさん釣れたことを喜び合っていました。

保育室には、ハンガーでつくった天秤を置いていました。二人はその天秤を見つけ、興味をもち始めます。 A「釣った魚入れてみよ！」 B「下になった方が重いんやで」 A「どっちが重いかな～」試しているうちに、魚の数によって重さが変わること気づきました。たくさん入れてどちらが重いか比べてみたり、同じくらいの量を入れて天秤が釣り合うようにしてみたりと、重さを目で見て感じる姿が見られました。



学びのポイント

魚釣りを何度か繰り返しているうちに、色を分けて釣るという遊びへ発展していきました。最初は釣ることだけを楽しんでいましたが、釣った魚の数を友だちと比べて競い合ったり、天秤を使って重さを比べてみたりするようになりました。



環境構成の工夫

色を分けて釣るようになったので、魚を入れる器に色をつけてみました。それにより、同じ色の魚をつるというルールが明確になり、友だちと同じ色を釣ってみるような姿も見られました。また、釣った魚の量を重さでも比較できるように天秤を用意しました。その後、さらに遊びが発展することを見通して、一定の時間内に何匹釣れるか競えるように、タイマーを用意しました。



AとBがペットボトルを投げて立てようとしています。なかなかうまくいきません。保育者「立たないね。どうしたら立ちやすくなるのかな」A「軽いからや」B「水入れてみよう」ペットボトルが重くなったことで、立ちそうにはなるのですがそれでもなかなか立ちません。その絶妙な感覚に子どもたちが夢中になっていきます。すると、Bのペットボトルが立ちました。それを見て、周りの子どももさらに熱くなって挑戦し始めました。

A「何で僕のは立たへんのやろう」B「水の量が少ないわ」何度も成功するBのペットボトルの水の量と比べています。A「形も違うな。下がボコボコやわ」AはBと同じ水の量に合わせました。保育者は、水を多くすれば立ちやすいと思い水をたくさん入れました。保育者「立ちそうなのに！！何で」C「先生のは、投げた時、水がポワンてなるやろ！水が多すぎるねん」その後は、いろいろな形、大きさのペットボトルで試していました。

次の日、ペットボトルを立たせることができる子どもが増えてくると、「いっせいのーで！」と掛け声に合わせて投げ、ペットボトルが立った子どもが1点という遊びが始まりました。ホワイトボードを出すと、自分たちの名前を書き丸をつけて競い合うゲームになりました。C「1, 2, 3...、僕、48回やで！すごいやろう」みんなで丸の数を数えて数字を記入し、毎日記録更新に挑戦していました。

💡 学びのポイント

繰り返し遊ぶことでペットボトルの形、大きさ、底の面積の違いに気づきました。透明なペットボトルを使うことで水の量が見えやすくなり、成功した友だちの水の量と比べながら、一番立ちやすい水の量（容量の約4分の1）を発見しました。成功したら丸を付け、友だちと一緒にその数を数えながら、記録更新に挑んでいました。

👍 環境構成の工夫

保育者も一緒に遊びながら、子どもたちが何の違いにより成功したり失敗したりすると考えているのかを読み取り、いろいろと試すことができるように、様々な形や大きさのペットボトルを準備しました。ホワイトボードとペンを準備したことで成功した回数が目に見えて分かり、目標をもって遊びを楽しむようになりました。



言葉による伝え合い

保育教諭等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。





絵本を手にとり、保育者に読んでと伝えるように渡します。保育者が絵本を開こうとすると、お気に入りの“いただきます”と書いているページを自分でめくり、いただきますのポーズをしていました。

保育者が、「いただきます」と言うと、嬉しそうに手を合わせたまま、何度も頭を下げ、いただきますの挨拶をします。そして、絵本に描いてあるイチゴをつまみ、食べるふりをしました。保育者が「パクッ」と言うと、口をモグモグ動かし食べるふりをしています。

「おいしいね」と声をかけると、嬉しそうに、別の保育者に「あーん」と言いながらイチゴを食べさせてあげる素振りをしていました。「ありがとう。おいしいね。」と言われると、保育室にいる保育者全員に「あーん」と言いながら配り歩きます。最後に、自分でもう一度、絵本からイチゴをつまみ食べるふりをしていました。「ありがとう」と保育者みんなで声をかけると、照れているかのように目の前の保育者に抱きつきました。

💡 学びのポイント

絵本を模倣して、保育者とのやりとりを楽しんでいます。保育者が子どもからの働きかけに応じることで、別の保育者とも同じようにやりとりを楽しむようになりました。絵や言葉からイメージしたことや保育者の言葉かけに身振り手振りで応じながら、人とかかわり気持ちを伝え合う喜びを感じています。

👍 環境構成の工夫

保育室に絵本コーナーをつくり自分でめくりやすい絵本を用意することで、好きな時に好きな絵本を手にとれるようにしました。子どもが絵本を読んでもらいたいときには、一対一で保育者がかわり、子どもの思いを受けとめています。保育室にいる他の保育者も一緒になってイメージを共有し、温かい雰囲気をつくるようにしています。



Aは10月からの新入児です。よくしゃべり、保育者との意思疎通もスムーズで、おやつの時間など保育者とのやり取りを楽しむことも多い子どもです。

ある日、おやつの時間にコップを持って、保育者に「パーイ」と向けてくることができました。それに応じ、Aと保育者は「カンパニー」を楽しみました。



後日、おやつの時間に隣の席のBがAに「カンパニー」とコップを向けました。そして、二人で「カンパニー」を楽しみ始めました。保育者も仲間に入り乾杯をしていると、自然と輪が広がり、同じテーブルの他の友だちも、つられてまねっこをして一緒に楽しみました。

その後もしばらく、「カンパニー」を同じテーブルのみんなで楽しみ、友だちや保育者と一緒につながる喜びを味わいました。

💡 学びのポイント

グループの友だちの間に、一緒にしたいと思える温かな関係が育っています。保育者や友だちと一緒に「カンパニー」と言葉や動作を楽しむことで、人と気持ちがつながる楽しさを味わいました。

👍 環境構成の工夫

安心して過ごせるように、グループを決めて同じ友だちと過ごす時間を設定しています。保育者が思いを受けとめたり気持ちや楽しさに気づき応答したりすることで、身近な人に親しみをもって接するようになっています。



カタツムリを見ている時に、何かを発見したようで、Aが保育者に「先生！これちょっと来てよ！」と、驚いた様子で伝えに来ました。保育者「どうしたの？」 A「カタツムリが人参ばかり食べてるの。人参好きなのかもしれない」しばらく一緒にカタツムリを観察することにしました。白菜と人参の上にカタツムリが数匹います。保育者「ほんまや〜食べてるなあ！」 A「やろ？やっぱりカタツムリ人参が好きなんやわ！」と自信満々の様子。 保育者「次は何するのかな〜このカタツムリ…」と言うと、Aは人参を食べていたカタツムリの動きを追ひ、じっと見ています。

BとCもやってきました。A「この子、人参好きなんだって」Bも小さな声で「この子ってこの子？」と聞いています。 A「そう！…ううん、違うわ。この子や」 C「ほんまやなあ」と言って一緒に観察していました。

C「何かこの子小さいなあ」 保育者「ほんまや、一匹だけ小さい。何でやろ？」 A「人参嫌いで食べてないからやわ！この子だけ」と、自分なりに理由を考えて伝えています。その後みんなで「大丈夫かな〜」と心配する姿も見られました。 B「このカタツムリも人参食べてないで」 A「…後で食べるねんって！」少しむっとした表情で答えます。観察を続けるうちに、カタツムリの口の動きが気になったABC。「この子口あるよ！」「この口、なんか笑ってるんじゃない？」「どこどこ？」と、様子を伝え合いながら、その発見を楽しんでいました。興味津々な様子でカタツムリを見ているABCが気になり、周りの子どもたちも順番にやって来ます。Aは人参が好きなカタツムリについて自分で発見したことを一生懸命伝えたり、みんなで他に何を食べるのかをじっくり観察したりしていました。



学びのポイント

友だちや保育者に、自分の思いや気づいたことを伝える嬉しさを味わっていました。カタツムリの様子を見て、なぜ一匹だけ小さいのか自分なりに理由を考えたり、じっくり観察することで新たな発見があり、2歳児なりに言葉を用いて伝え合ったりしていました。



環境構成の工夫

子どもたちが自由に生き物を観察できる環境を整えたり、季節に合った図鑑や絵本を選んですぐに子どもたちが取り出せるようにしています。保育者も一緒に生き物の様子を見ながら、気づきや発見を伝え合う楽しさを味わえるようにかかわりました。



それぞれが段ボールの車に乗って遊んでいましたが、1列に並べてセロハンテープで車同士をくっつけると、電車へと変化しました。「電車はどこを走るのかな？」と保育者が尋ねると、「線路がいる」「段ボールつなげよう」と線路づくりが始まりました。「めろん駅までつなげよう」「めろん駅まで来た」「次はいちご駅までつなげよう」と目的をもって取り組んだり、できた喜びを伝え合ったりしながら線路が伸びていきます。

つなげていた段ボールの線路が折れ曲がり、その形を見たBが「トンネルやな」と線路にトンネルをかぶせます。C「ほんまや」保育者がトンネルに頭を入れながら「あれ？このトンネル通れない」と言うと、C「車やったら通れるんちゃう」と玩具の車を探しに部屋に戻りました。他の遊びをしていた子どもたちも、このやり取りを見て玩具の車や電車をもって来ました。

「ガタンガタン」「トンネル通れた。もう一回通ろう」「私ももう一回」とトンネルや線路の上を走らせることを楽しみました。長い段ボールを曲げて、人が通ることのできるトンネルもできました。「テープもってくるわ」と友だちと支えながら壁に貼り付けトンネルが完成。

次の日、登園するとトンネルがつぶれていました。「トンネルがつぶれてる」「テープがいる。誰かここ押さえて」とトンネルを支え、「(セロハンテープだとすぐにとれるから)強いテープがいるな」とテープを取りに行きました。しかし、テープのちぎりにコツがあります。「ちぎられへん」「Dがちぎったるわ」と、テープをちぎる子ども、トンネルを支える子ども、テープを貼る子どもと、自然に役割分担しながらつぶれたトンネルを直し、再び電車ごっこを楽しみました。

💡 学びのポイント

友だちの言葉を聞いて、同じイメージをもちながら遊びを楽しんでいます。自分たちの遊びに必要なトンネルを修復するために、友だちに助けを求め、会話をしながら役割を分担して遊びを進めていました。

👍 環境構成の工夫

子どもが考えたことが形になるように材料を用意したり、友だちと同じイメージをもって遊ぶことができるように言葉かけを工夫したりしています。クラス以外の友だちとも遊びがつながるように、遊んでいる様子を知らせたり興味をもつような言葉かけたりし、子ども同士のかかわりが広がるように援助しています。



園行事でイモを焼いているのを見てABが「焼きイモごっこしたい!」とすぐに遊び始めました。保育者が焼いている様子を見ながら「うちわがいる!」「手袋もしてた!」と遊びに必要なものを用意したり、「おイモはどうしよう?」と考えたりしながら、新聞紙・画用紙・花紙などの素材でつくっていました。

園庭でイモを焼いていたので、“外で焼く”というイメージができ、翌日から遊びは園庭に場所を移しました。店役と客役に自然と分かれ「おイモくださーい」「はいどうぞー」などとやりとりを楽しんでいます。しばらく遊びが続きますが、次第にお客になってくれる友だちが少なくなってきました。

ある日、話し合いの時間にCが「お客さんがあんまり来なかった」と言ったことから話し合いが始まります。家庭での経験から「おイモ〜おイモだよって言えばいいんちゃう?」「ほっかほかのおイモだよ〜って言うねんで」「あと、おイモを運んで売ったらいいねん」などと、遊びを楽しくできるようなアイデアを考えて出しました。

“たくさんの人に食べてもらいたい”という思いから話し合い、「おイモ〜おイモだよ」「大きいおイモもありますよー」と、みんなで考えた言葉を用いながら遊んだことで、たくさんの人に自分たちのつくった焼きイモを食べてもらうことができました。



学びのポイント

お店屋さんごっこのやり取りが、遊びを重ねるにつれて、よりリアルなものになっていきました。また、看板は『置き型』のものと運んで売る用の『持ち運び型』がいるなど、遊びに必要な道具についておもしろいアイデアがたくさん出ました。



環境構成の工夫

子どものアイデアを実現できるように早いタイミングで素材や道具を用意し、子どもと一緒に準備をするようにしました。また、話し合いの場を大切にし、困ったことや嬉しかったことを共有したり、子どもの意見に対して保育者の考えを伝えたりして、遊びがさらに展開するように話し合いました。



社会見学でプラネタリウムに行き、星空の鑑賞をしました。

素材の中に長い芯（120 センチくらい）があるのを見つけた A。A「これ使いたい」と長い筒を持ち歩いています。何に使うのかと見てみると、筒を覗いて A「あ！双眼鏡みたい！」（イメージは望遠鏡） B「ホンマや！しまじろうが見てたやつ」と、望遠鏡づくりが始まりました。

A は「星がいっぱいいる！蟹座とか」と画用紙に星空を描き始めました。しかし、数人で星を描いていきますが、なかなか画用紙いっぱいにはなりません。話し合いの時間に、A「星をいっぱいにしたい！！」 C「（廊下の）窓をぜ～んぶ星にして、宇宙にしたいんだ！」 子どもたち「いいよ、やろう！」みんなで星空をつくることになりました。

知っている星座や自分たちで考えた“ぎょう座”“ピ座”“ハート座”などたくさんの星座を窓いっぱい飾ります。 C「流れ星は？流れ星も見たい！」 A「ここから流れ星が見れますよ～」順番です。並んでください」「予約もできますよ」 D「予約したいんです」 A「わかりました。長い針が11（55分）になったら来てください」など、思いを伝え合いながら言葉のやり取り楽しんでいる様子が見られました。



学びのポイント

プラネタリウムで“星空観賞”という共通の体験をしていたので、A がやりたいことを伝えた時にクラスですぐにイメージが共有されました。周りの友だちと一緒に星空をつくり、他のクラスの友だちや異年齢の友だちにも声をかけたことで、会話を楽しみながらかわって遊ぶことができました。



環境構成の工夫

星座の本を置いたり地球儀と天球儀が一緒に置かれているものを置いたりしたことで、星に興味をもち、自分たちが知っている星座の名前を確認する様子が見られました。廊下の窓を利用したことで特別な空間になり、星空を見ている気分が一層盛り上がりました。



豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。





手を出して保育者に甘えに来る子どもたち。
ひざに座って、にっこにこ♪
歌を歌うと、身体を左右に揺らして楽しんでいました。



友だちの様子を見て、
“ぼくも～” “わたしも～” と、言わんばかりの表情で保育者のひざに集まってきました。手で友だちに “つめて” とアピール。みんなそろって、ゆらゆら身体をゆらして遊びました。

近くで遊んでいた子どもも保育者の背中につかまり、身体を上下にゆらして楽しんでいました。



学びのポイント

保育者が子どもの思いを受けとめ、応答的にかかわることで安心して過ごさせていることが感じられました。保育者とのふれあいを求めてかかわりたくなることがふえて、歌に合わせて身体を揺らしていました。



環境構成の工夫

楽しい雰囲気の中でゆったりとかかわれるように、広いスペースを確保しました。歩行が安定しない子どももいるので、不意の動きに対応できるように、周りの様子にも気を配っています。



絵本が大好きな子どもたち。絵本コーナーで椅子に座り自分でめくって読んだり、保育者が読み聞かせをしたりすると楽しそうに見ていました。その中でも「おばけなんてないさ」「ねないこだれだ」の絵本が好きでオバケに興味をもつようになりました。

オバケに興味をもちだした子どもたちは、オバケ探しを始めました。保育者が「オバケいるかな？」と声をかけると窓の外を眺めて「オバケおった」と言ったり、“パッチン”と手で捕まえてみたりして楽しんでいました。

オバケの世界を楽しんでいたある日、偶然反射で光が動いていることを子どもに知らせると、「なんかおる」と目を輝かせ光を見に行っていました。「何だろう？」と子どもたちに尋ねてみると、「オバケや」と早速捕まえようと手を伸ばし始めました。

またある日、最初はタライの中に水を入れて遊んでいましたが、オバケの的あてをつくってみると、水鉄砲を使って水をかけて遊ぶようになりました。ジョウロで上から水を流し、「雨が降ってきた」と遊んでいるとオバケにもジョウロで雨を降らせてあげる姿や、「オバケさん暑いな」と言うとコップをもってきて水をあげる姿も見られました。



学びのポイント

子どもたちは、絵本の読み聞かせが大好きです。オバケの世界に興味をもったことで、想像力を働かせオバケの世界を楽しんだり、光をオバケに見立てたりして遊んでいました。オバケのイメージを友達と共有して、一緒に楽しむ姿も見られました。



環境構成の工夫

オバケの絵本に興味をもち始めたのでいろいろな種類のオバケの絵本を用意しました。保育者も一緒にオバケのイメージを共有し、おばけの世界と一緒に楽しむことでより遊びが楽しくなりました。水遊びの的をオバケにしたことで、水に親しむきっかけとなり、水遊びを楽しむことができました。



夏以降、ごっこ遊びに興味をもちだした子どもたち。ままごと遊びの中でも、友だちの「いらっしゃいませ～」の声につられて、「いらっしゃいませ～」とあちらこちらから聞こえてきます。

手づくりのサツマイモやジュースが入ったつむりのコップ、おもちゃの食べ物がいっぱい並んだテーブル越しに「これください!」「はい、どうぞ」と受け取り、笑顔で食べる真似を楽しんでいました。

そんな時、幼児クラスの子どもたちが“店屋を開く”という話を聞いて、乳児クラスもお菓子屋さんで参加することにしました。

ドーナツやおせんべい、クッキーなどをつくり、できあがった手づくりのお菓子を並べ、周りの子どもたちは大きな声で「いらっしゃいませ!」と言うけれど、特に恥ずかしがり屋のAは、とても小さな声でした。

保育者がAの声を聞き取り「〇〇ください」と注文すると、早速、お盆にのせて「はい、どうぞ!」とやりとりを楽しんでいました。Aは美味しそうに食べてもらい、いっぱい声をかけてもらうことで少しずつ「いらっしゃいませ!!」と大きな声で話せるようになり、大満足の様子でした。



学びのポイント

お店屋さんごっこの中で、人との触れ合いややりとりをする楽しさを感じていました。また、自分なりにイメージをもってつくったお菓子を食べてくれる様子を見て、満足げな様子でした。一人ひとりがお店屋さんになりきって遊びを楽しんでいました。



環境構成の工夫

お店屋さんごっこを楽しむために、店番の子どもがつけるエプロンを用意したり品物が分かりやすく取りやすいように並べる工夫をしたりしました。保育者が子どものイメージに沿った言葉をかけることで、子どもたちもやり取りを楽しんでいました。また、幼児の店屋に出店したことで、たくさんのお客さんが来てくれ、存分にお店屋さんを楽しむことが出来ました。



プリンカップに切った画用紙と水を入れて置いていたところ、色が出たことをきっかけに色水遊びが始まりました。子どもたちは画用紙を入れて揉んだり、他クラスの友だちの姿を見て水性マーカーを使ったりして色水をつくって遊んでいました。

「ジュースみたい」の一言から、ペットボトルを用意すると、色水をジュースに見立てて遊び始めました。さらに遊びが広がればと思い、保育者が絵の具を用意すると「紫になった！」と偶然にできた新しい色に驚いたり、「緑にしたいねん」とつくりたい色をつくろうと色を混ぜて試したりしていました。

緑は「メロンティー」、赤は「トマトジュース」、ピンクは「カルピス」とジュース名を考えたり、偶然できた何とも言えない色にも「これは辛いジュースやねん」とできた色から想像したことを伝え合ったりしながら、ジュースづくりを楽しみました。

たくさんのジュースができ「ジュース屋さんにしたい！」という声からカウンターを出すと、すぐにジュース屋さんごっこが始まりました。「いらっしゃいませー！」「ジュース屋さんでーす！」「トマトジュースください！」と店員や客になりきってやりとりを楽しんでいました。そこから「レジつくる！」「カードいる！」とお店屋さんごっこの遊びに広がっていきました。

💡 学びのポイント

画用紙を水に浸けると「色が出た」という経験から、色水をつくる方法を考えていました。「揉んで色を出そう」としたり友だちの姿を真似たりして、自分なりに試して遊びました。色水遊びを通して混色の楽しさや混色の法則に気づき、色からイメージを広げジュースづくりを楽しんでいました。

👍 環境構成の工夫

色水を混ぜ合わせやすいよう、様々な形、大きさの容器を用意しました。そして、赤・青・黄の三原色の色水を用意して、一緒に遊んでいる友だちと色からイメージする味や飲み物の名前を共有できるようにしました。その後、より多くの種類のジュースをつくれるように、三原色以外にもピンク・黄緑・水色・白など様々な色を用意しました。



バーベキューごっこからピザづくりに遊びが発展していきました。

話し合いをしていると… A「ピザって網で焼かへんで」 保育者「何で焼くの？」 A「なんかこんなやつ」と手で表現するのですが、なかなか伝わらないので絵を描いてみました。B・C「あー！そんなん見たことある」 保育者「ピザ窯のことかな？」 A「そうそう！窯！！」

次の日、イメージできるように、“窯”の写真をいくつか用意しました。A「これこれ！この“窯”やわ」 B・C「入れて！僕たちも一緒につくりたい」 A「いいよ。ほんじゃ、このダンボール茶色に塗ろう」

B・Cが塗っていると、他の子どもたちも集まってきました。Dは写真を見て炎をペンで書き始めます。B「何でそこに赤塗るの？」Dは身振り与中国語で伝えようとしませんが伝わりません。そこで写真を持って来て、指さしました。B「あ！火描いてるんや」Dは思いが通じて嬉しそうにしています。

次に、AとBはピザを焼く時に使う“パーラー（ピザ用フライ返し）”づくりを始めました。A「ピザ載せるやつつくりたいねん」 保育者「どんなものがある？」 A「ダンボールかな」 B「ダンボールいいなあ！」 A「じゃあダンボールと、あと棒みたいなんいるわ」 保育者「素材置き場になかないか？」 B「あるで！私はこれ（広告紙を丸めてつくった棒）にする」 A「僕はこの棒（ラップ芯）にする」と、自分たちのイメージに合うものを選んで、遊びに必要なものをつくる楽しさを感じていました。



学びのポイント

自分のイメージを友だちに伝え、一緒に遊びを進めていく楽しさを味わいました。また、言葉で伝えるにくいことも写真を用いることで理解してもらえ、思いが通じ一緒に遊ぶ喜びを感じることができました。様々な素材から自分なりに考えて材料を選び必要なものをつくったり、友だちとアイデアを認め合ったりしていました。



環境構成の工夫

“窯”について子どもたちなりに考えられるように話し合いの場で取り上げました。イメージが伝わるように、ホワイトボードに絵を描いてみたり、保育者が写真を3種類程用意したりしました。一人ひとりのイメージが膨らみ、ピザづくりに興味がなかった子どもたちも遊びに参加し、友だちとつながっていきました。



髪の毛を切ってきた A に「かわいいね」と声をかけると、「美容師さんになりたいねん」というので、「なろうよ！」と保育者と2人で美容室づくりを始めました。Aは、美容室のことをよく知っていてパーマ、カラー、メイクなど、どんどんイメージを広げて遊んでいます。その様子を見て他の子どもも集まってきて、どんどん遊びが広がり、園内の夏まつりでも美容室を出店しました。

A「いらっしゃいませ〜!どんな髪型にしますか？」 4歳児「プリキュアみたいにしてください」 A「髪の毛洗いますね」 4歳児「きもちいい〜」 A「お化粧、どれがいいですか？」「かわいくなりましたよ〜!」「次の方どうぞ〜」本当の美容室のように、お客さんと会話を楽しみながら一緒に遊んでいます。



夏まつりでは、異年齢児もお客さんとして来てくれ、Aだけでなくクラスの他の友だちも、年下の子どもに優しく声をかけ美容師になりきって楽しく遊んでいました。

💡 学びのポイント

美容室づくりを通して、友だち同士で協力したり相談したりする姿が見られました。また、つくりたいものをどんな材料を使ってどのようにすればつくれるか、試行錯誤していました。異年齢児とかかわりながら、年長児としての自覚や思いやりの心が育ちました。

👍 環境構成の工夫

つくったものが何かわかるように、それぞれ入れ物に入れ名札をつけました。また、いつでもつくれるように廃材や道具を美容室の近くに置きました。看板をつくり、いつも同じ場所で店を開くことで、遊びの拠点となりました。また、話し合いの時間にAの遊びを紹介しクラスの友だちと共有したり、異年齢児のお客さんとかかわり方についても一緒に考えていきました。

令和元年・2年度 幼児教育研究
様々な遊びの中で健やかに育つ子どもの育成をめざして

小学校へ伝えたい

豊かな環境の中で育つ“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”
～0歳児から5歳児までの育ちを小学校へ～

令和2年2月29日 発行 (R-153)

【発行】八尾市

八尾市教育委員会

〒581-0003 八尾市本町一丁目1-1

【TEL】072-991-3881（代表）
